
かみしゃまと、いっしょ。

ゼロキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かみしやまと、いっしょ。

【Nコード】

N5477P

【作者名】

ゼロキ

【あらすじ】

ごく普通の女子高生、吉中柊が気付くと、そこは間違えようもなく異世界だった。

普通はパニくる所も、なんとなく冷静になってしまふ彼女の使命は

……

異世界を楽しむこと？

それも、神しゃまと一緒に。

異世界、はじめました。

気がつくと、異世界でした。

いや、頭がおかしくなったとかそうゆうことではなくて。

辺りは水晶の洞窟

一面地底湖？

現在私の座り込んでいる場所は、水中から生えてるような六角水晶群ではなく…台座のように平らな水晶である。

蛍のような虫が、点滅しながら飛び交っていて…でも、蛍よりも光量が大きくて明るい。

室内の間接照明の青いバージョン？くらい。

神秘的…すぎて、すぐさま理解した。

こんなところが、地球上存在してたら絶対有名観光地。

ゆえに、ココは異世界である…と。

しかしこの場に座り込んでいる私以外の人がいるならば、やはり聞くだろう。

「あの、ここはどこですか？」

目の前で少し楽しそうに自分を覗き込む外人の青年に、私は痛む頭を押さえながら聞いた。

「ん？分かってるだろう？異世界だって」

「……」

はい。なんとなく返答予想出来てました。

何か雰囲気が…私が彼の立場だったら、そう答えるだろうなあというものだったので。

「…言葉、通じるんですね…」

「ああ、神言語だからでしょ」

「しん…」

なぜかスムーズに脳内漢字変換された「しんげんご」にて、意味は分かったが…ちよつと分かりたくなかった。

「あなた、神様ですか？」

なんというか、ありきたりなお約束？

でも私性格的に、心読まれようと超常現象起こされようと、あんまり信用置けないと思います。

人間的な意識のある神様…て、どうよ？

「あー…神様ってわけではないな、正確には」

青年の否定にちよつとほつとする。

普通のシャツにジーンズの神様…外人さんですが、別に美形ってわけでもない…いや、不細工でもないけど、普通ってオーラが漂ってる神様……ないよね。

「まあ、自覚薄いけど、神様っていえば神様かも」

「へ？」

どうゆう意味が聞く前に、彼はしゃがみこんでいた姿勢から立ち上がった。

「俺の名前はアーサー、アメリカ人で少々日本贋員のゲームマニアだった」

お嬢さんの名前、聞いていい？と小首を傾げられ、私も名のった。

「私は吉中柊、日本人で女子高生」

そうして座り込んでいた姿勢から、彼のように立ち上がる。

腰が冷えたし。

うう、体がバキバキいう。運動不足かしら…

「よしなかひいらぎちゃんか、こちらではヒイラギ・ヨシナカか」
いい名前だねと一つ頷いて、彼…アーサーは言った。

「ヒイラギちゃん、君はこの世界の神しやまに選ばれましたっ」

「…神、しゃま？」

私、物凄く胡散臭そうな表情を浮かべた自信があります。

説明、終わりました？

胡散臭そうな表情の私に、アーサーさんは「うーん…」と唸った。

「神しゃまとしか言いようがないんだなあ、神様って感じじゃないらしいよ」

「ないらしい…って、誰が言ったんですか？」

「アーサー」

自身を指さす青年に、思わずため息をつく。

「人事に聞こえましたが…」

「いや、俺のことだし…うーん、説明難しいな」

少し考えこんだアーサーさんは、何か思いついたかのように顔を上げた。

「よりしろって、分かる？」

「イタコとかのですか？神を宿す？」

「そう、それ」

「……嫌な予感がするんですが…」

「あー、ごめんね。もう選ばれちゃってるし、宿っちゃってるから」
「え」

アーサーはにこつと笑った。

…イイ笑顔である。

「じゃなきゃ、君も神言語使えないから」

「……使ってるんですか？私」

「日本語喋ってるんですよ？意識的には。神言語使ってなかったら、俺に英語で伝わらないから」

一応日本語、片言理解できるけどねと苦笑され、私は喉を押さえた。
本当に何も、違和感ないのですか？

「まあ、この世界の神様だから、この世界の住人相手の言語は自動翻訳されるから。読み書きも『理解』出来るよ」

「……あなたも、神を宿しているんですか？」

「いやいや」

半信半疑で確認をとるけれど、あっさり否定されて私は首を傾げた。
「もう、よりしろ本人のアーサーは帰っちゃったから。俺は宿った方」

すつと手を差し出される。

握手を求められるかのように。

たぶん意味があるのだろうと、私も手を差し出してみて……するつとすり抜けた手のひらに鳥肌を立てた。

何か…濃い濃密なモノをすり抜けた感じはあった。

固まりかけの寒天の中とか、稲田の泥水に手を突っ込んだような…

「…やどつてた、ほう？」

「そ、よりしろ本人が帰れるようになる頃、宿ってた方はその人の分身みたく人格を持つんだ」

「人格を持つ…と、いうことは」

「そう、君の中に宿った神しゃまには人間の求めるような神様像はない。意識すれば分かると思うけど、自分の中にほわほわ〜としてあったかくて、神様っていうより神しゃま？としか言いようのない力を」

実は自覚していた。

なんというか、小さな子犬とか子猫を腕に抱いている気分。

可愛くて可愛くて、ずつと抱いていたいような撫でていたいような気分が、気づいた時からあった。

そして子犬、もしくは子猫側からも、嬉しい大好きーみたいな…懐いているような反応がある感覚。

なんというかソレらが、アーサーと名のる存在の言葉を受け入れているのだ。

これがなければ、私の反応はもっと冷淡だったろうし、家に帰せと訴えていただろう。

家に帰せと訴えないのは、私を私の家に帰せるのは私の中に宿ったモノだけだという感覚があるからである。

「…なぜ、私？よりしろはこの世界の人でもよくない？それから、私に宿っている神…うん、神しゃまね、確かにかみしゃまとしか言いようがないわ」と、あなたは別物みたいだけどなぜ？」

「んーなぜヒイラギちゃんを選ばれたかったのは、正直分らない。俺がアーサー選んだ時も今、ヒイラギちゃんが感じているような存在なんだぜ？たまたまこう…宿りたくなって、手を伸ばして連れてきちゃったみたいな感覚じゃないかな？たぶん」

首を傾げるアーサーさんに、感覚的な問題だと言われているようで…納得した。

「あ、なぜこの世界の住人じゃダメなのかは、分かるぜ。俺の前の人とかその前の人とか世界とのしがらみが多くて、宿主ごと壊れて世界も壊しかけたから」

アーサーさんは両手を広げた。

「この世界は壊れかけてたのを俺達で修復、創造したものなんだ。俺、じゃない、アーサーが俺の宿主になったのはたまたま偶然だったけど、神しゃまにとっては宿り心地が良かったんだよ。第三者の立ち位置に立てる存在ってのがね」

で…と、言葉は続いた。

「俺で上手くいったから、また異世界に手を伸ばしたんだと思う。あと、神っていつでも唯一神じゃないから俺らは、神としか言いようのない力の固まりだけ…この世界っていうエネルギーでもあるんだ。俺は俺として宿ったアーサーの個性人格があるけど、普段は世界に溶け込んでる。君の中の神しゃまとは一緒であって別物だし…」

私は片手を上げて、何とか説明しようと言葉を選んでいたアーサーさんを止めた。

なんとなく分かったし、分からないことも…何となく説明されてもされなくても、如何しようも無いことは分かった。

今切実に知るべきことは一つだろう。

「私、いつ帰れるかしら？」

「そりゃ、神しゃまが満足するまで？俺はアーサーと相性良すぎて、千年ほど引き留めちゃったけど…あ、ちゃんと浚った時と場所に帰したから…たぶん、大丈夫だよ」

根拠のない保障にため息が零れたが、自分の中の神しゃまが自分がいるのは嫌？みたいに窺う気配が可愛くて……絆された。

千年なんて先は考えられないけれど…とりあえず、嫌になるまでは付き合ってあげましようと思っってしまうくらいには……宿った神しゃまの気配は可愛かった。

旅人、はじめます…近くの村まで。

「それじゃあ次に、この世界のことを簡単に説明しようか」

とりあえず状況を受け入れた私に、アーサーさんはこれまでまったく気にしていなかったことを切り出した。

「この大陸の名前はアルカイダ、この星の中で大きな大陸はあと二つあるけど、そこには名前はついていない…未開の地。あとは少数民族がいたりいなかったりする小さな島国も東にいくつか。ここは霊山で名前はない「人」の入れない土地。大抵、人の入れない土地は聖域だけど、ヒイラギちゃんを入れるから気をつけて」

「何を気をつけると？」

「入れることを知られちゃうことを。生き神様扱い…されたい？」
私は首を振る。

こんなことになって、神しゃまといかないような存在を感じても、私は基本無神論者なのだ。

正月には神社にお参りにいって、クリスマスにはケーキを食べ、星を見ては神話にもとずく星座を思い出し、死んだら近所の寺の墓へと入るだろう。

そうゆう日本人なのだ。

「ま、気をつけることはそれと、何でも思いのままになるってことかな？」

「え」

「君に宿っているのは？」

「……神しゃま……」

「そ、望んで叶えられないことはほとんどないから。それこそ世界だって滅ぼしかけるくらいのは出来る。神しゃま宿したよりしろが、この世界で一番強い存在だから…ヒイラギちゃんがこの世界を壊そうとしたら止められないし…でもそうしたら高確率で自分自身を壊すようなものだから、気をつけてね」

「……うわー…」

「で、この世界ですが、簡単に言うとオンラインゲームの世界です」
物凄く楽しそうなアーサーの表情に、私は何となく疲れを感じたため息をついた。

うん。まあ、それだけで何となく通じちゃうから便利よね。

「RPGな世界なわけね？」

「そう、剣と魔法、モンスターの世界。典型的な」

アーサーさんは本当に楽しそうに、笑った。

「ヒイラギちゃんも気に入ってくれると嬉しい。アーサーと俺で作った世界を。君が世界を好きになってくれればくれるだけ、世界は癒え成長するから」

そして神しゃまも成長しますと、凄く優しい声で言った彼は…何となく確かに神様っぽかった。

「他に何か聞きたいこと、ある？」

「いいえ、知りたいことにきりはないけど、そうゆうのは実際世界を見て体験して知るわ。ところでこの出口はどっち？」

アーサーさんの指す方角を見、水の流れてゆく先なのだなと思う。たぶんこれは川に通じていて、川を辿れば村とかがあるんだろう。私はその場で軽くジャンプしてみる。

何でも思い通りになると言われた通り、私は……大きく…洞窟の天井近くまで飛び上がって、ふんわりゆっくりと降りた。

確かめてから、もう一度ジャンプする。

今度は、アーサーさんの指し示した出口の方へ。

水から生えている水晶柱の尖った先端に、ふんわり降りて、つま先立ちする。

「それじゃあ、さようなら」

「いいや、ヒイラギちゃん、そこは『またね』にしようよ。ここで

呼べば俺は応える設定になってるから」

ひらひらと手を振られ、私も振り返す。

そうつ風の設定したアーサーさんに、感謝する。前例でも今の私と同じ人がいるって、心強い。

「そうね、じゃあ…」

ココが家ってわけじゃないけど。

「いってきます」

私の言葉にアーサーさんは目を丸くして…あははっと声を上げて笑って言った。

「いってらっしゃい」

……と。

こうして私は『たぶん召喚の間』から、旅立ったのだ。

旅人、続いてます。

さて、洞窟を抜けるとそこは山の中だった。

地底湖のような場所だったそこは、山の内部でも頂上付近だったようだ。

空は青く、木漏れ日溢れる木々と…洞窟内ほど大きい物はないが、至る所から生えている水晶…

森には道らしき道がないので、川の上を歩く。

…うん。普通（？）に、沈まずに水の上に立てた。

漫画とか小説なんかに見る、超常現象的なことは一通り出来そうである。

しかし近場の村に向かうのは良いとして、今の私の格好は旅人向きではない。

セーラー服に学校指定の鞆。

実はずっと手に持っていた。

だって、ココで気づく前までは下校途中だったんだもの。

洞窟内は寒かったから、コート着用でもよかったけど外はちょっと温かくて、下山したらもっと温かいだろう。

春っぽい空気だ。

向うは冬、二学期後半だったのだが……

とりあえずマフラーを外して、鞆の中に突っ込む。

薄手の鞆はそれだけでいっぱい。不格好に膨れた。

中には携帯と財布、空になったお弁当箱くらいしかはいってないのに。

リュック、欲しいな…

自分の私物である黒いリュックを思い出す。旅行用でそれなりに大きい。

すると、目の前で『力』が発生した。

力としか言いようがない。

空気の密度が変わったような…神しやまの力なんだろうことは分かった。

そして、目の前に…私が欲しいと望んだリュックと似た物が現れた。私のリュックではない。何せデザインの、ここはこうだったらいいなあ…でも無いからこれでいいやと買った私物ではなく、私の欲しかった理想通りのデザインの物だったから。

物質創造力？

「うわー…」

少し川がカーブしていて河原があつたので、リュックを持っていったんそこへ足を下した。

色々準備するのに、水の上は情動的にちょっと落ち着かなかったの
で、丁度いいといえば丁度よかった。

鞆と出現したリュックを置き、コートを脱ぐ。

私の使える力は神しやまの力。

なんでもありな力。

それに基本RPGな世界なら、たぶん存在するだろう。

四次元ポケット的な魔法道具が。

私はリュックを覗いた。

………まっくらで、底が見えなかった。

うん、出来あがる時に考えついちゃったからだろう。

本当、何でもありだ。

石を放り込んで、ちよつと怖かったけど「石」と思いながら手を突
っ込めば、掴み取り出せた。

鞆を突っ込み、とりあえずここで装備を整えることにする。

剣と魔法の世界にふさわしく。

神しやまの力で作り出したのは、リュック、シャツ、ジーンズ、そしてブーツ……うん、ごめん欲しかったけど買えなかった趣味に走りました。

あまり、剣と魔法の世界にふさわしくない。現代的な物中心が、真っ先に作り出された。

まあ、少数民族の住む島国出身者と偽る予定なので、あまり気にしないでおく。

それらを身につけ、制服一式はリュックに仕舞った。

ポケットの沢山ついたベストも作り出し、そこへどんな衝撃を受けても割れることのない試験管を、何本が差し込む。コルク栓をしてある物の中身のいくつかは、なんちゃってポーションである。

…あと紅茶（笑）だって、紅茶のギフトとかである物を基本に想像しちゃったんだもの。

薬入れのベストを着込むと、私の胸はつるぺたなので、これだけで一見細身な少年のような体格になる。

髪はそれなりに長い、肩甲骨を隠すくらい。

さらさらの癖のないストレートは、自慢の持ち物であるが…それはあまり女性を感じさせるものではないらしい。

友人が言うには美少年剣士……目つきが少々キツイせいか、あまり女性らしい甘さを感じさせない顔立ちのせいもあるのだが。

まあ、『美』少年は友人の欲目だろう。

私の容姿はごく普通のレベルだ。

夏に一度暑くて、ポニーテールにしたら「つんでれっぽいこと言ってっ」と頼まれた揚句に押し倒され、貞操が危うかった一件を思い出してしまい目元を押さえた。

あれは友人が可笑しいせいだ。

…ぶっ飛んだ友人を思い出したせいもあり、装備品は刀とする。

でも素人が扱えるわけがないので、刀には敵対相手への達人的技量（任意で峰打ちあり）効果を付属しておいた。

腰にベルトをつけ、刀を下げ……旅人っぽいフードつきのコートを

作り出し羽織った。

リュックを持って、自身の格好を見て…とりあえず納得する。

うん、ギリギリコスプレっぽくない。

第一異世界人発見、初戦闘しました。

さて、改めて川の上を進むこと数十分。

何となく空気の濃度が、変わったように感じた。

気づけば水晶柱も、辺りには見当たらなくなっている。

「聖域を出たのかな…」

しばらくすると上流では滅多に無かった河原が点在するようになり、そしてその一つに道らしきものとつながっていることに気付いて、川の上から降りた。

道は大人二人分くらいの幅で、踏み固められた跡があった。

とりあえず水筒を一つ作り出して、川の水を汲む。

生水だけど聖域から流れてきているのだから、たぶん大丈夫だろう。なんでもありな力はあるけど、乱用はなるべくしないようにしようと思う。

…うん、この装備とか色々、もう十分乱用しているみたいだけど。

「…これからこれから」

ケーキバイキングに行ってから帰ってくる途中の、友人のダイエツト宣言のような口癖を口にしつつ、水筒をリュックに仕舞い道へと向かった。

森の中は綺麗だった。ハイキングに来ているみたいだなと思う…木の種類は見たことないものばかりだけど、ちよつと楓っぽい。

異世界じゃなく、異国を旅行しているみたいだ…そんな考えはすぐにかき消えた。

私は走り出していた。

人の怒鳴る声、争う気配。

何だか嫌な感じのする方へ。

だって、子供の声でした。

争いあっているのが大人同士だったら、私は気にしなかっただろう…

でも、こんな森の中で、子供と言いつ争っている大人なんてろくなものじゃない。

そして私は見た。

子供：と、というか少年を押さえつけている大人達を。

具体的に言つと、少年の服は破かれ：大人達のうち一人は自分のズボンから性器を露出させようとしている最中で、少年は押さえつけている大人とは別の大人に口を手で塞がれ涙目で唸っていた。

初戦闘に躊躇いは無かった。

刀を握つたとたん、体が刀に付属させた効果で自然に動く。

あつという間に大人三人を切り捨てた：いや、峰打ちだけど。

私に向つて声を上げさせる暇は、与えなかった。

変質者や強姦魔に情けは無用。

ドウツと倒れた三人に、襲われていた少年は目を丸くする。

打たれたのか頬が赤く腫れているが、美少年であった。

黒髪に青い目、肌色は褐色。

女の子っぽい雰囲気はないけど女顔で、大きくなったら色気のあるエキゾチックな美形になりそうである。

……確かにホモのロリコンに狙われそうな：と、悪いけれど納得してしまう。

それほど幼くはなさそうだが：十二・三だろうか。

「もう大丈夫だよ」

そう言つて微笑むと、少年の表情はくしゃと歪んで私に抱きつき、大きな声を上げて泣き出した。

うん、友人が見たら羨ましがるであろう状況だな：と、思いつつ少年の背を撫でた。

少しして、泣きやんだ少年は、恥ずかしそうに私から身を放した。助かってほつとして：泣いてしまったことが、恥ずかしいのだろう。

「怪我は？」

「だ、大丈夫です。何もされてませんっ」

「……………うん、殴られた？」

後は押し倒され、押さえつけられた傷が見える。

何もされてません発言はスルーしておく。あいつら、慣らしもせず
に突っ込むつもりだったのか…とか、考えてしまったけど黙ってお
く。

シャツは破かれ、ズボンはナイフを入れられたのか切られ、大事な
所等丸見えであった。

リュックの中から仕舞っていた方のコートを取り出して、着せる。

うん少年、私のことを男性だと思っているね？

でも男に襲われたばかりなんだから、相手が男でも警戒した方が
いいよ？

試験管を一本取り出し、コルク栓を抜く。

「ポーシヨンって知ってる？」

「え、そんな高価なものただけませんっ、擦り傷だし、頬も頭も
平気です」

「ん？頭？」

ずっと後頭部に手を回せば、ぬるりとした感触がした。

「いたっ」

手には血がついていた。

「…飲みなさい」

背後から鈍器で殴られたのだろう怪我に、私の声は固く命令形となり
少年は私の手についた血を見て、結構自分が酷い怪我をしている自
覚をしたのか、頷いて試験管の中身を飲みほした。

怪我は私の想像通り、淡く光る光りの粒が生まれ跡かたもなく消え
た。

少年はその効果に目を丸くする。

…RPGなら、似たようなのあっても可笑しくないと考えたんだけ
ど…

と、反応を待つ。

「これ、マジックポジションじゃないじゃないですか……………」

「普通のポジションとは違う？」

「普通のポジションはこんな、あつとゆう間に癒えたりしませんし、値段だつて桁が違いますっ」

少々顔を悪くして、そんなお金僕持つてませんと訴える少年に苦笑した。

「弁償しろなんて言わないから、安心して。私が飲めと命じたんだから、気にしなくていい」

頭を撫でて…怪我は治つても残っていた血と汚れに立ち上がる。

「向うに川があつた。そこで汚れを落とそう」

「あ、はい」

何となくぼーとした少年の様子に首を傾げ、一応手を繋ぐ。

…まあ、大泣きしたし疲れたんだろっ。

「…と」

行きかけて足を止める。峰打ちして倒した大人達が呻き声を上げたので、その存在を思いだしたのだ。

放置？しておけるわけがない。

私は、近くに生えていた木に巻きついた蔓に触れた。

「つるのむち」

うん、だつて汚いモノを露出させた大人を縛りあげるの、面倒だし…ポケモン技が私の民族の魔法技術つてことで。

ファンタジーっぽい魔法呪文を唱えるのは恥ずかしいけど、「火のこ」とか「水でっばう」ならそんなでもないし。

なんでもありな力の制限にも、丁度いいだろうし。

…ゲームやってたわけじゃないから、そんなに詳しくないけどね。蔓が生き物のように伸びて、大人達をくるぐるの芋虫状態にしたのを見て、少年はやっぱり目を丸くしたけれど私の手から逃げようとはしなかったので、ちよつと安心して川へと引き返す道へと向かった。

少年、リージと私。

川で汚れを落とさせ、リュックの中に手をつ突っ込んで作り出したタオルとシャツ、ズボンを取り出す。

私のサイズだけど、まだ小さい少年なら着れるだろう。

…うん、目の前で全裸になられてもね、今更騒がないし…いいけどね。

「あの、洗ってきました」

「うん、はいタオル」

「あ、ありがとうございます」

「着替えも私のだけど、使って。下着は流石に貸せないけど」
自分の着替え設定だと、男性用下着なんてあるわけないしね。

「いえ、そんな、十分です。ありがとうございます、本当に」
「ん」

頷いて、微笑む。

すると少年は耳まで赤くなって、慌てて服を着出した。

お礼を言うのが、恥ずかしい年頃なのかしら？

「あの、僕の名前はリージです。あなたのお名前を聞いてもいいですか？」

「うん、私の名前は、ヒイラギ」

「ヒイラギ様は」

「いや、様付けはいらないよ？」

なんで様付け？と首を傾げつつ、断りを入れる。

「え、でも…えっとヒイラギ、さんは貴族の方ではないんですか？」
「なんで？」

「マジックポーションなんて凄いものを、僕なんかにはポンとくれるし…身につけている物も高そうだし、タオルとかふわふわだし」

「うん、私の故郷では一般的な物だから、気にしないで」

「どちらからいらしたんですか？」

私は山の方を指さす。

「あっち、の方向から来たんだ。元は小さな島国出身でね、大陸に来たのは初めてだから、貴族どころかここのお金だって持ってない一文無しだよ？」

「聖域つて入れませんよね」

「うん、だから迂回してね、村とか探してたんだ」

「なら僕、案内出来ますっ」

「よろしく頼める？」

「はいっ」

少年と手を繋ぎ、道を進む。

「この先に僕らの村、シントレーベがあります。聖域の麓の村なので、それなりに栄えてます。周辺に強い魔物が出現しないこともあって、初心者な冒険者には丁度いい土地で知られています」

「ふーん、ギルドはある？」

「はい、勿論。小さいですけどね」

「私でも登録できるかな？大陸出身じゃないけど」

「出来ますよ、文字が読み書き出来て犯罪者として手配されてなければ、誰でも登録は可能です。僕も一応ギルドの冒険者なんです」と、少年の手が離れた。

「あ、ちょっと待ってて下さい」

「ん？」

「いえ、さっきの奴らに最初に襲われたのがこの辺りで、装備品とか採取した物とか落として…と、ありました」

ナイフとベルト、革袋を拾って少年は掲げ見せてくれた。

「そういえば、さっきの奴らとは知り合い？どうゆう状況で襲われたの？」

少年…いや、リージの表情は私の言葉に強張った。

「知り合いではないですけど、ギルドで見た覚えはあるので冒険者

だと思えます。僕は採取の依頼を受けて、今日はこの森にやってきました…そこをいきなり背後から、殴られて…最初は採取物の横取り目的かと思っただんですが……」

「ああ、うん、ごめん。もういいから」

震えるリージを抱きしめて頭を撫でる。

「ごめんね」

そう囁くと、リージの震えは止まった。

その代わり、また耳まで真っ赤になっていた。

「あ、あの、もう大丈夫です」

恥ずかしがってるリージは可愛かったが、私は友人ほど意地悪な性格ではないので、からかうことなく解放してあげた。

再び手を繋ぎ、村へと向かう。

一・二度、兔に角が生えたような生き物を見かけたが、襲いかかってくるような物はいなかった。

結構な距離を歩いたが、私に疲労は欠片もなかった。

神しやま効果かもしれない。

リージも慣れているようだったが、襲われたり大泣きしたせいもあってか少し疲労が見えた。

「村まであと、どれくらいかな？」

「二十分くらいです」

「んー、それくらいなら村まで頑張って歩いて、休んだ方がいいかな？頑張れる？」

「え、あ、はいっ、僕なら平気ですっ」

…子供って、こんな可愛い生き物だったっけ？

友人の弟なんて、挨拶もろくにしない生き物で、すぐに私から逃げ出すし、友人によく遊ばれて癪癪を起している子供っぽい姿しか浮かばない。

うん、比べようもないか…あの友人の弟なんだし、その友人の私も警戒されているんだろう。……強く生きろよとしか言えない。

「リージは冒険者だっけ」

「はい。ランクはCです」

「ランク？」

「A、B、C、D、Fランクがありまして、Fの方がなり立てです」

「へえ、Cランクなんだ？」

「はい、なり立てですけど」

少し嬉しそうに言う姿を見て、なるほどなあと思う。ちゃんと子供らしいけど、長い間働いているせいでもあるだろう、どこかしつかりとした芯があるのだリージは。

「リージみたいな小さい子が冒険者になるって、大陸では普通なのかな？」

「あの…僕一応十四なんですけど」

「ん？うん、でも声変りもしてないでしょう？」

私のアルト声よりも、女の子っぽい声だものね。

「…別に珍しいってことはないです。村中での依頼なら、子供のおこずかい稼ぎ程度の物もありますし。孤児院から出たばかりの十四・五の男の子なら、結構冒険者になる子は多いです」

「うん、でもリージの年でそのランクなのは、珍しいんじゃない？」

「…僕は三年前に両親を亡くして、あの村出身だし、両親の残してくれた財産もあったので、孤児院には入らずに独り立ちしたんです」

「……………なるほど」

謝る必要はないだろうと判断して、代わりに頑張ったねと微笑んで見た。

リージはやっぱり恥ずかしくなったのか、また耳まで真っ赤になった。

村、到着しました。

村は長閑な田舎という雰囲気だった。

小さな石垣で囲まれた土地には、世界法則が働いている気配を感じた。

うん、お約束の力と呼ぼう。

『街中に魔物は入ってきません』ってやつだ。

この石垣が大きく崩れたりしたら、解けてしまいそうな代物だが。村の入り口から、まっすぐ行くと大きな建物が一つだけ頭を出していた。

「あれは？」

「教会です、聖域の近くなので、立派な建物なんです。神父さんは管理が大変そうですけど。貴重な時を知らせる魔法具があって、日のあるうちは一時間ごとに鐘がなってカラクリ人形が踊るので、この村唯一の観光建造物です」

「ああ……」

…うん、大手百貨店みたいななんて言っても通じないだろうけど、時間の概念は共通のようだ。

まあ、アーサーさんの創造した世界だし、共通点は普通に多々あるだろう。

現在は二時十八分くらい…

「あっちの建物がギルドです」

手を引かれ、教会周辺の建物群の一つへと向かう。

微妙な時間帯のせいか、あんまり村人を見かけなかったが、ギルドの建物内は小さな居酒屋も兼用しているみたいで、いくつかのテーブルがありその二つには人が座っていた。

四人のグループと、パイプ煙草をふかしている老人一人。

飲食とはカウンターが違うのだろう、出入り口近くの方にあるカウンターでは眼鏡をかけた緑色の髪をしたお姉さんが、こっそりこっ

くりと居眠りをしていた。

奥のカウンターの中は調理場のように見え、動いている人影も二つ見えた。

「ミアリスさん……」

少々呆れたようなリージの表情に、これはいつものことなのだろうなというのが雰囲気で分かった。

「おい、ミアスちゃんっ、リージが帰ってきたぞっ、お客さんつれてっ」

テーブルの一つを塞いでいた四人のうち、リーダーっぽい青年が声を上げて……ミアリスと呼ばれたお姉さんはビクツと震えあがって、顔を上げた。

「いらっしやいませっ、本日はご依頼ですか？クエストですか？」

……うん、残念な美女だ。

スタイルよく顔立ちだって美人なのに、色気ゼロな天然系。

彼女の目も髪と同じ緑だった。

「ミアリスさん……」

「あれ、リージくん、今日は帰ってくるの早かったわね。採取は上手くいった？あれ？何だか行く前と服装が変わっちゃってるけど？」

リージの表情が強張る。

これは、私が言った方がいいだろうか？

「実はその、襲われて」

「えっ、襲われてっ、盗賊でも出たの？この辺の魔物相手なら、リージくんは問題なく対処出来るレベルだしっ、怪我、怪我はっ？」

私が口を出す前に、リージは青ざめながらも説明を始めた。

ぎゅっつと握っていた手に力が入る。

そして受付の女性は、軽く混乱してしまう。……少し落ち着け。

「いえ、彼の話では冒険者らしいですよ、背後から殴りかかれたそうです」

「え、あれ？あなたは？」

……うん、天然さん。ずっとリージの隣に立っていたのに、今やっと

気づくって……

「私の名前はヒイラギ、彼が襲われていた所を助けた者です」

「ありがとうございますっ、ヒイラギさんっ、リージくんを助けてくれてっ」

身を乗り出してお礼を言う彼女に、ちよつと引く。

「あつ、私の名前はミアリスです。よろしく願いますね」

「……はあ、はい」

「それでは。いらっしやいませ、本日はご依頼ですか？クエストですか？」

にこつと再びなセリフを口にした彼女に、少し頭痛を感じた。

「……森の中に彼を襲った冒険者達を、縛りあげて転がしてきたんですが、放置したままでもいいですか？」

「え？」

「私は島出身で、大陸は初めてなので一般的な大陸の常識を知りません。今回伸した相手達がギルドの冒険者らしいので、聞きにきました。責任問題とか発生しませんか？」

「え、えーと？」

「ミアリスちゃん、私が警備兵呼んできてあげる。リージくんに危害を与えるなんて、いい度胸してるじゃない」

さつき声をかけてきた男性のいるテーブルから、今度は赤毛にネコ耳の女性が拳を手のひらにスパーン、スパーンと叩きつけながら立ち上がった。

うん。受付のお姉さんの反応からいつても予想していた。

実はリージ、このギルドのアイドルだね？

リージはきょんととしていて、私の手を引いた。

「あの、ギルドの登録をするんじゃない？」

「うん、それは後でも出来るからね。別にあいつら放置しとして、魔物の餌にするなら、それはそれでいいかもしれないけど」

「いつ、いえ、そんなわけにはっ」

「あ、ねえ、そのあんだ、縛り上げた奴らのとこまで道案内して

よ」

ネコ耳女性が戻ってきて言うのに、私は「あ、はい」と返した…が。

「いえ、僕が行きます」

と、リージが手を上げた。

「リージ」

私は思わず、咎めるように彼の名を呼んだ。

「だって僕のことと、これ以上ヒイラギさんの手を煩わせるわけには…っ」

私はリージの頭を撫で、身をかがめて彼の顔を覗き込んだ。

「リージ、君はポーションで治したといっても、酷い怪我をしていた。それに疲れているだろう。無理をしちゃダメだ。私の言っていることが分かるね？」

目を合わせて、真剣な表情で言う。

リージは分かってくれたようで、…でも心苦しいのか、ギクシヤクと頷いた。

ん？

なんで皆、こっちを見て赤くなってるんだろうか？

私と、異世界一日目終了。

「あ、こいつら最近、他所から流れてきた冒険者だわ」

ネコ耳の女性、レリーフさんが転がしておいた奴らを見て言った。

「しかし、こんなにぐるぐる巻きにするの、面倒じゃなかった？」

「いえ」

私は木に繋がっている鳶へと手を置き、技名を唱えた。

「つるのむち」

鳶は思い通りに動いて、芋虫状態から起き上がって歩けるくらいの拘束へと変え、プチリと鳶を切らせた。

「あんた、精霊術師っ？」

「いえ、私の島に伝わる魔法です」

ちよつとぎよつとした様子だった兵士さん達二人も、私が何でもないことのように言っと、やることを思い出したのか男達に手をかけた。

「おい、立て」

意識は取り戻していた男達は、身動きして唸る。

「そこのガキに襲われたせいで、動けねえんだよ」

「被害者は俺達だっ」

うん…しらばつくれるつもりなんだ？

私は冷笑を浮かべていたし、隣ではレリーフさんの髪がボワリと膨らみ広がった。

「…じゃあ、なんで、あんた下半身露出させてるの？」

酷く甘ったるく、けれど恐ろしい響きを伴ってレリーフさんの声が響いた。

私もリージも『襲われた』としか言わなかったけれど、芋虫状態から脱した後の、男の格好に予想がついたのだろう。

確認するかのように視線を送られたので、一つ頷くことで肯定する。私達の様子に危険を感じたのか…兵士達二人が、ずさつと男達の側

から離れた。

「そうか、動けないなら仕方ないよね」

チャキリツと、刀を抜き…

レリーフさんは腰につけていたグローブを、手にはめた。

「いらないモノ、切り落とせば軽くなって動けるようになるかな？」

「あら、あたしが全身マッサージ、してあげてもイイワよ？」

ふとレリーフさんと目が合い、微笑みあう。

それから数十分、醜い悲鳴と命乞いが、心地よく森の中に響いた。

再び村に戻る頃には、日が落ちかけていた。村の入り口に近づくと

…小さな人影が待っていた。

「ヒイラギさんっ」

「リージ？」

満面の笑みで駆け寄ってきたリージは、兵士に引っ立てられた囚人の影にびくりとして足を止めた。

しかし、悲鳴を上げたのは三人の男達の方だった。

「ひいっ、ごめんなさいごめんなさいっ」

「許してっ、許して下さいっ」

「た、助けてっ、助けてっっ」

…頭が可笑しくなったかのように同じ言葉を繰り返す姿が、ちよつと気味悪かったのか…大きく避けるようにして私の脇へと並び、手を握った。

兵士さん達も少し疲れた表情で「ではここで、ご協力感謝します」

「ほら、いくぞ」と、詰め所へと彼らを誘導しつつ去って行った。
「リージ、休んでなさいと言ったのに」

「いえ、その…何だか、ヒイラギさんがいないと落ち着かなくて…」
真つ赤になって、恥ずかしそうに言うリージに、レリーフさんが「
くはっ」と何らかのダメージを受けていた。

友人を思い出すなあ…その反応。

まあ、ともかく

「仕方ないな。…とりあえず、まずは換金できる所…か。いい加減
お腹すいた…」

それに眠い。こちらに来たのは下校途中だったし、とつくに夕飯食
べて寝て、朝食食べて学校行って…な、はずだ。

「あっ、あのっ、ご飯なら僕が奢りますっ！宿だって僕の家泊っ
て下さいっ」

「え、でも、年下の子にたかるのは…」

ぽんと肩に手を置かれる。振り向けばレリーフさんが笑っていた。

「いいじゃない、奢られてあげなさいよ」

「レリーフさん」

「レリーフでいいわよ、あんた気に入ったし。あたしもヒイラギっ
て呼ばせて貰うわ」

そう言うと、二人して引つ張られギルドへと戻ることとなった。

ギルドは込む時間なのか、席は満席だったが、昼間のレリーフのつ
れだった三人が手を振り、そのテーブルに混ぜてもらうことができ
た。

リージの奢ってくれたパンとスープは、凄く美味しかったし。レリ
ーフが仲間達の注文したお酒のつまみや肉料理を、私とリージに取
り分けてくれたりもして…お腹はいっぱいになった。お酒を飲まさ
れそうになったけど、民族上の掟でと断っておいた。

うん、未成年うんぬんの問題ではなく…友人に一度悪戯で飲まされ
たことはあるけど、記憶がなくなっただけからだ。それだけならともか
く、翌朝の友人が恍惚としていて、女同士も有りかも…と、呟いて

いたのがちよつと怖かったのだ。

考えたくないけど、シヨタコンっぽかった友人が、バイになった原因…酔った私なのかもしれない……本当に私、何をした？
ちなみに『私』の衣服に乱れはなかった。友人は半裸だったが。

…一生、思い出さなくていいことなんだろう。

換金所、にて。

目を覚ますと、木目の壁が見えた。

「…朝、か」

うん、今更夢落ちとかも期待しません。

私の中で、神しゃまがはしゃいでいるのが分かるし。

更に私の腕の中には、リージがいるし。

……うん。リージの家で、今は亡き両親のベッドは存在するものの、使い物になる布団はリージのベッドの物だけだったから。

並んで寝ていたけど、狭いのと夜はちよつと冷えたので、湯たんぽがわりに抱き込んだらしい。

まあ、リージも私の胸にしがみ付いてるけど。

……顔を埋めるほどの膨らみも谷間もないけど、一応柔らかみはあるから気持ちいいんだろうね…手のひらがしつかりと……

私はそおつとリージの手を胸から外して、抱きしめていた腕を解き、身を起こした。

女として反応が間違っていようと、襲われたばかりで怖がってる子供を突き放せるわけがないから、気にしない。

服を着替え、装備を確認する。

ゆるく三つ編みにしていた髪を解き、櫛をいれているとリージがもぞもぞと身動きして身を起こした。

「…あ、ヒイラギさん」

「おはよう、リージ」

「おはようございます」

リン、ゴーンツと鐘がなって、教会が時を知らせる。
9時だ。

ちょっと時間がかかってしまったのは、手元にあるビーズ作品のせいである。

うん、よく考えたら換金するような物、持ってなかったんだよね。鞆の中に入れてばなしだった友人への誕生日プレゼント製作の、ビーズ装飾道具一式で簡単に指輪をいくつかとネックレスをいくつか作り上げました。趣味なので…と、いうか初めて作った時から誕生日プレゼントにねだられる。友人の手持ちのアクセサリーは、ほとんど私の作品だったりする。

いつかは調金も始めたいのだが、予算が……うん。ともかくリージにも売れると保障してもらったので、売りに行きま

す。

換金所はギルドの隣の家でした。

「すげえな、あんた細工師か？」

背の小さい、赤毛にネコ耳のおっさんが感嘆の声を上げた。

……体系はドワーフっぽいのにネコ耳、で、ある。

奇妙に似合っていて、ごついおっさんが妙に可愛い。

「いえ、細工師というわけではありません」

リージに私が作ったと聞いたからだろう、おっさんのセリフに首を振った。

「しかし、始めて見るな、こんな小さな石をより合わせて作ったアクセサリーは」

「そうですか？」

「ああ、大きさをそろえるのは勿論、穴を開けようとしたら砕いちゃうぞ、この大きさじゃあ」

宝石は大きい方が価値があるんだが、細工師の技術の価値がこれにはあるな…なんて呟かれ、沈黙する。

うん、ビーズです。天然石も混ぜてるけど、数百円で買えます。

評価されるのはそこかと、少しがっかりしていると、おっさんは更に口を開いた。

「なんといっても綺麗だ。こりゃ貴族や王族にだって売れるぞ？こ

んな所だと、金貨二十枚で精一杯になっちまうし、正直今家が出せる全資金になっちまって、買いとれねえんだが……」

綺麗と言ってもらえて、気分は良くなった。

「あ、じゃあ一個で」

とりあえず一番小さな指輪を指さしてみる。

……うん、金貨一枚で家族四人が、一年楽に暮らせるんだよね？

昨日酒場で聞いたお金の価値を、思い出して苦笑する。二十枚なんて貰っても困る。

「いや……一個で金貨二十枚なんだが」

「……………」

私は目元を揉んだ。

リージの顔色も、少し悪い。うん、こんな値段付けられるとビビるよね？

私が朝、起きてから……無造作に作り上げてたの、見たものね。

ネックレスを三個、指輪は十二個作った。

……総額、考えたくない。

「……私の故郷では、この石も細工もそう珍しくはないので、もつと安く買い取ってもらいませんか？」

「いや、できねえ、こんな凄い物を安く流通させられねえ。あんたの故郷では珍しくなくても、俺が初めて見るアクセサリーだ、故郷は大陸とまったく取引をしない島なんだろう？ そうゆうとこ特有の技術は基本、何でも高価になっちまうんだ」

「……私から安く買い取って高く売ってわけには……」

「ばーろー、いくわけないだろうがっ、鑑定士のスキルを失うわっ、あ、もしかして換金所を経営するには、詐欺が出来ないようなスキルが必要なんだ？ と、納得する。」

うん。スキル……存在するんだ……本当、ゲームだね。

「そのスキルで金貨二十枚、ですか」

「ああ、俺が生きてる間、これ以上は現れないって分かるレア・アクセサリーだ」

レア……まあ、異世界の物だものね。私が道具を創造しないかぎり、現れるわけがないか。

「あ、じゃあ、こっちの石だけつてのなら売れますか？」

余っていた残りの石と、ビーズを取り出す。

「そうだな、これなら金貨五枚で買い取ろう」

うん、指輪を作るにしても必要数に足りない数だったけど……この世界の装飾物に混ぜてなら、使い所はあるだろう。買い取る場合は、金貨七枚になるらしい。

金貨を五枚貰い……

そのうちの一枚を、銀貨八枚と銅貨二十枚にしてもらった。

現在の所持金、金貨四枚・銀貨八枚・銅貨二十枚、硬貨は零である。

ちなみに換金所のおっさんは、レリーフの親父さんだとリージに聞いた。

ああ、そういえば同じ赤毛にネコ耳……奥さん、背の高い人なんだろうな……と、思った。

冒険者に、転職。

……なんか働かなくても、当分食べていけるお金が入ってしまったけど……とりあえずギルドに向った。

先に、ちよつと遅い朝食を取るけれど。

豆のスープとパンを食べながら、冒険者を観察する。

どうもこの時間帯は、比較的若い人が多いみたいだ。

換金所から少しぼんやりしていたリージに、食べるよう促すと、リージは少し不安そうな表情で私を見た。

「やっぱりヒイラギさんは、凄い人なんですね」

「私がつて言うより、故郷の技術だらうけどね」

「でも凄いですっ」

そう言つて頂垂れる。

「リージ？」

「ヒイラギさんは、これからどうするんですか？」

「ん？」

「ヒイラギさん強いし、技術もあるし……すぐ『初心者村』には用がなくなるんだろつなあと思つて……」

……うん、実際ほとんど神しゃまの力です。

初めて刀を達人なみに振り回して……そうゆう筋肉とか鍛えてないから、刀を放して急激に疲れても、あつという間に回復するし……それにただの回復じゃないみたいなんだよね……なんか、明らかに筋肉が……ついてきてるんだよね……

まあ、いつか神しゃまの後援が無くても、平気になるくらい鍛えられたら……ちよつと楽しいかもしれない。

「しばらくはこの村にいる予定だけど？」

「本当ですかっ？」

リージは顔を上げて笑顔になった。

「うん、大陸の常識に疎いしね。リージがよかつたら、しばらく私

に色々教えて欲しいな」

「も、勿論ですっ、あ、あの、よかったらその間、僕とパーティを組んでもらえませんか？」

「パーティ？」

「えっと、冒険者同士の仲間というか、グループみたいなもので」

「ああ、なるほど。うん、よろしく」

握手をして、交渉成立。

私とリージは、朝食の残りに取りかかった。

さて、食事を終え…やっとギルドの窓口に向う。

ミアリスさんが、にこつと微笑んだ。

「いらつしやいませ、本日はご依頼ですか？クエストですか？」

…その挨拶はお約束なんですか？

「冒険者登録をしたいんですが」

「はい」

カウンターの中から、ごそごそつと道具を取り出し並べられる。

「島人さんなんですよ？文字は書けますか？」

「ええ」

用紙と羽ペンを渡され、受け取る。

名前に年齢

主用武器

獲得スキル

と、書く欄があった。

「あ、スキルはこちらの水晶球に手を触れて、頭に浮かんだ物を書き出してくださいね。会得していない物を書いても登録はされませんので、正直にどうぞ」

ふーん…と、ちよつと濁った緑色の水晶に触れてみる。

これらも魔法具なんだろう。

獲得スキル

『神しゃま』『世界創造』『神言語』『空中浮遊』『水上歩行』『サムライ進化SSS』『剣技・刀B』『ポケモン魔法』『細工師AA』『魔道具創造』『家事全般C』

ぱつと浮かんだのがこれで、おいおいと内心で突っ込む。

『神しゃま』スキルに入れとくなよ…と。

勿論アーサーさんに対してだ。

あと、サムライ進化ってなんだと突っ込みたい。
と、考えたとたん、頭の中に浮かんだ。

『サムライ進化』（名刀と呼ばれる特殊な剣に選ばれ主となった者だけが、まれに得られる特殊スキル。その刀を振るに相応しい技量と力を、急速に身につけることが出来る。）

うーわー…説明機能つきですか…

AAとかBってのは何かな？

『スキルレベル』

D・初心者。まったく知らない人よりはマシ

C・趣味のレベル。一流とは言えないけれどそれなり。

B・一流

A・超一流

AA・他の評価系スキル持ちに認められると、まれに得られるレベル
S・伝説

SS・人神の祝福持ち
？

SSS・神しゃま効果

「……………」
えっと…サムライ進化は元々あったスキルで、神しやまのよりしろの肉体だけに発現するレベルってことか……………」と、いうかよりしろだけが持てるレベルかよっ

『固有スキル』
個人の持ち物で、レベルの値がないもの。

うん、やばかった…アルファベットのついてないのは、私のオリジナルになるのか…神言語はよりしろのみのスキルだからかな？
…これって書かなければバレないかな？

習得スキル
『スキル偽造』

「……………」

『スキル偽造』（習得スキルを偽ることが出来る。『世界創造』スキルの持ち主だけが得られる）

「……………」

「あの、ヒイラギさん？どうしました？」

結構長い間固まっていた私に、ミアリスさんは首を傾げた。

「何か問題でもありました？」

「いえ…」

『サムライ進化A』 剣技・刀B』

『一族魔法SS』 細工師AA』 家事全般C』

とだけ書いておいた。

只今、転職中。

私の書いたスキルに、ミアリスさんは目と口を大きく見開いた。

「え、え、SSーっ！？」

そして予想通り叫ぶ。

「人神の祝福持ちなんて、初めて見ましたっ！」

「島の私の一族しか使えない魔法なので。そもそも祝福を得ていないと、島の出入り出来ませんから」

につこり笑って偽る。

うん。この魔法で海を渡った設定にするための、レベル偽造ですから。

騒がれるのは覚悟の上である。

「そんなに珍しくないですよ？島では私の他に、五人は祝福持ちです」

友人や友人の弟、知り合い達の顔を、ぱっと思ひ浮かべながら言った。

ただ単に偽るよりも説得力が増すだろう。

人神っていうのは、神しゃまと違って人の信仰が作り出した神っぽいし。それなら島特有の神で、一族の守り神的なものの祝福なら、有りではないかと思う。

「この村のギルドでは初なんですっ」

とりあえずミアリスさんの興奮は、スルーしておく。

サムライ進化のレベルは、名刀のレベルにも付随するものだろう。

魔法刀だし…だからとりあえずAにしておいた。

剣技・刀Bは、魔法刀効果とサムライ進化効果での引き上げが入っているだろう。

このまま刀を振るうのに体が、サムライ進化で対応していけばSレベルになれるかもしれない。

だって、私作ったこの刀、一応銘は平仮名だけど『ざんてっけん』

だもの。

それにふさわしくあるなら、伝説級にはなりたい。

「さて、書けましたけど」

まだ何か言いたそうだったミアリスさんだったが、とにかく用紙を受け取って石板の上にのせた。

石板が淡く発光して、用紙の…記入した部分が消えた。

用紙を除けると、石板の方に文字が淡く発光して移っていた。

「カード発行」

ミアリスさんがそう宣言すると、石板の上で光りが集まって手のひらサイズの石板と同じ色のカードとなった。

「こちらがお客様のカードとなります。カードと水晶に触れて下さい」

スキル確認をした水晶球に再び触れ、カードを触るとカードにはFという字が刻まれた。

これは冒険者レベルなんだろう。

「スキル確認・カード更新には次回から銅貨一枚かかりますけど、新たにスキルを得ると受け付けられるクエスト数が増えますので、スキルを得た・スキルのレベルが上がったと思ったら、確認と更新は投資と思ってして下さいね」

なるほど…と、頷いておく。

「誰かと組む時や依頼人へのレベル・会得スキル確認証明の場合は『履歴表示』で示されますから」

「履歴表示？」

確認したいなと思って呟くと、カードは再び淡く光って…石板サイズに広がった。…光りの文字だけが。

ヒイラギ

年齢 16

主用武器 刀

会得スキル

『サムライ進化A』 『剣技・刀B』
『一族魔法SS』 『細工師AA』 『家事全般C』

冒険者レベルF（初心者）

依頼数0

クエスト数0

達成件数0

失敗件数0

「なるほど」

「ヒイラギさん、僕の履歴も見せますね」

少し緊張したような表情でリージが言つて、「ギルドカード」と呟く…うん、ちょっと驚いた。

手元が光つてカードがどこからともなく、出現…したんだもの。もしかして必要ない時は消えてるのか？ 凄いな、なくす心配がない。「履歴表示」

リージ

年齢 14

主用武器 ナイフ

会得スキル

『薬草知識C』 『剣技・ナイフC』
『聖石採取C』 『家事全般D』

冒険者レベルC（村の冒険者）

依頼数2

クエスト数89

達成件数80

失敗件数 9

「あの、こんなスキルしかないですけど…いいですか？」

「勿論」

にこつと笑いかけ…

「で、パーティ契約はどうすれば結べるかな？」

首を傾げて聞いてみたら、なぜかミアリスさんが絶叫した。

転職、完了。

「なに？ミリアスさん…」

絶叫したミリアスさんに、リージが顔を顰めて言った。

うん。初めて見る表情に、口調だ。

そこはかとなく冷たい響きの声と、冷たい眼差し。

リージのオリエンタルな美貌を引き立てて、いつもより大人っぽく見える。

心臓には優しくないが。

うん、ちょっと迫力あるわ！馴れ馴れしさを拒絶する雰囲気だ。

そんなリージを気にした様子もなく、ミリアスさんは大きな身振り手振りをつけて、カウンターから身を乗り出して言った。

「だって、リージくんっ！これまでアイリーフちゃんにいくら誘われても、ずーとソロだったのにつ」

「それが何？」

リージの眉間に皺が寄って、ますます不機嫌そうになる。

「僕は冒険者ごっこがしたくて冒険者になったんじゃない。生活のために冒険者になったんだ。半分遊びのグループに関わってなんていられないよ」

「でも、アイリーフちゃんはっ」

「それに、あんなのが勧誘とは僕は認めないね」

「うぐっ」

きつい眼差しと声に、ミリアスさんは声を詰まらせる。

なんか知らない名前も出てきたし、リージの知らない表情にも驚いて、話に入れなかったけど…

うん、気にかかることが一つ。

「ごめんリージ、私も生活のためって言うより半分観光目的…」

「いえっ、ヒイラギさんには助けてもらったし、だからってわけじゃないけど少しでも助けになれば」

私の言葉にリージは即座に首を振って、声色も表情も柔らかいものに戻して言った。

「その…ヒイラギさんは凄いスキルの持ち主だし、すぐに僕の助いなんて必要なくなると思うけど…」

「そんなことない。助かるよ?」

「じゃあ、パーティ組んでもらえますか?」

「うん。こちらこそ、よろしくね」

そう返すと、履歴表示をしていた光りが一瞬強く輝き…一番下に文字が増えていた。

パーティ契約

相手 リージ

パーティ名・無名

リージの方にも…私の名前が契約者として刻まれていた。

「パーティ名?」

「通り名とかです。名のつて、世間に定着すると登録されるから」

「あ、その場合もこちらで銅貨一枚で確認、登録となります」

少し複雑そうな表情で、でも姿勢を正してミアリスさんは言った。

「カードは必要とする時以外は消えます。カードが必要な時は「ギルドカード」と呼びかければ現れますから。必要としない時に言葉を口にしても、現れることはありませんから」

さっそく依頼の紙が貼られたボードの前で、色々見学してみる。

「この村ではそれほど危険なクエストは無いので、採取系とお使い系がほとんどです」

「うん。あ、聖石 百グラム・銀貨?」

一枚だけ桁の違う依頼料の紙に目を止める。

「そう言えばリージのスキルの中に、聖石採取ってあったね」

「ええ、聖域近くの土地でまれに見つかる石で、教会関係の聖具を作ったり魔法使いや聖騎士の武器や防具作成に必要ならしいです。僕はスキル登録できるくらい見つけるので」

リージは袋の中から石を取り出した。

聖域でいたる所に生えていた水晶柱だった。

大きさは桁違いに小さいが。

小指：くらいの大きさだ。

「これで十グラムくらいですね：あの依頼は聖域近くの土地に、常時貼りだされてますよ」

「へえ」

「基本クエスト受け付けは自己責任で、この依頼書の下に書かれているBっていうのがこの村では一番危険なクエストです。大抵の依頼はDレベルですね、何も書かれていないのはFレベルで、村の中でのお手伝い関係になります」

「ふーん、冒険者のレベルがFでも、出来るならBとかも受け付けられるってこと？」

「ええ：それが保障出来るスキルなんかを持っていれば：ってことで、ヒイラギさんなら大丈夫ですよ」

「うん。でもしばらくはリージに色々教わりたいな、薬草知識、とか？」

「はいっ、勿論」

はにかむような笑顔を浮かべたリージに、ほのぼのとした気分を味わう。

うーん：ミアリスさん、リージに嫌われてるのかしら？

最初寝てたのを咎めるように呼びかけた時は、呆れた感じで：そう冷たい感じはなかったけど：

そんなことを考えていると、リージの表情が固く強張った。

視線は：私の後ろ？

と、振り返ると……少年少女、三人が険しい表情で立っていた。

リージと、幼馴染。

赤毛にネコ耳の…幼女？が。腕を組んで睨んでいる…うん、背が凄く小さい。リージよりも頭一つ分くらい小さい。背中に魔法使いの杖っぽいものを背負っていて、なぜかゴスロリ系の服装だ。

赤毛にネコ耳…何となく予想がついた。

「アイリーフ…」

リーズの表情から、柔らかさがごそつと消えた。

「久しぶりね、リージ。聞いたわよ、冒険者に襲われたそうじゃない」

「……なに？」

リージの冷たい反応に、ネコ耳幼女の表情は益々きつくなった。

「なに？じゃないわよつ、だから言ったでしょ、ソロは危険だつて！リージはまだ子供なんだから、私達のパーティに入りなさいって！」

「……子供って、一歳しか違わないだろ。アイリーフの方がどう見ても年下だし」

「な、なによつ、私だつて年頃になれば、レリーフお姉ちゃんみたいに大きくなるもんっ！」

ぶわつと赤毛が膨らむ。

…やっぱりレリーフの妹か…背丈は父親に似てしまったのだろう。

リージより年上とは思わなかった。

ネコ耳幼女の背後にはリージより少し体格のよい少年二人が、これも険しい顔でリージを睨みつけていた。

「ともかく今度こそ、私達のパーティに入りなさいっ！」

「いやだね」

リージは即答して私の手を取った。

「いきましよう、ヒイラギさん」

にこつと微笑みを向けられて、促され私は苦笑しつつ、それに従っ

た。

ギルドから出た所で背後から、大きな金切声が響いた。

「なっ、なっ、なによっ、なんなのよっ、その男はあああつっ！
」

うん。ちょっと面倒臭そうな子だなあ……………

「すいません、ヒイラギさん…依頼書、見てる途中だったのに…」
しゅんとした様子のリーシの頭を撫でる。

「大丈夫。さっきの子は？」

「アイリーフといって、僕の一つ上で十五の…今の村人では唯一の
火の魔法使いです」

「へえ、大陸の魔法使いか」

「僕の母が魔法使いで、アイリーフに同じ火の適正があつたので教
えていたんです」

「もしかして、幼馴染？」

「はい…父さんと母さんが死ぬ前までは、それほど仲は悪くなかつ
たんですが…いつの間にかあんな感じになって」

…あれは、友人の言葉で言うならツンデレ属性持ちなのではないか
しら…………うん、さっきの発言の本質はあなた一人は心配なのっ、私
の力を必要としてっ！というものだろうか？

つれの二人は心からリージを忌々しく思っていそうだったけど、彼
らがアイリーフに惚れてるなら有りえそうだ。

「僕がよく聖石を見つけてくるんで、よく取れる場所を独り占めし
ているんだらうと思われてますし」

「そうなの？」

「いえ、薬草採取が僕の受けるクエストの中心なので、それで他の
人より見つけやすいんだと思います」

「なるほど、よく地面を見てるからね」

その後は村の中を案内してもらった。

…人種的には色々だろうか？村の大きさは…宿屋や道具屋武器屋など、それぞれ一件ずつあればことたりてしまいうくらい。

飲食店はギルドと宿屋、真昼亭（軽食店？）があった。

建物として一番大きいのは教会だが、二番目に大きいのは宿屋だった。

半分はだいたい冒険者が住んでいて、半分は定期的にくる商連隊が泊るらしい。

私は村にいた間は、リージの家に泊ることを約束させられた。

そういえばポーションは確かにそれなりの値段がした。

銅貨五枚である。

マジックポーションは銀貨五枚はするらしい。

勿論、品質によってピンからキリまであるようだが…

ちなみにポーションよりも安く、持ち運びのできる丸薬が、冒険者の持ち歩く薬で…ポーションの入った容器は三角フラスコに似たピンドで確かに、持ち歩くには不自由しそうな形と大きさだった。

私の試験管入りのポーションの量で効き目があるのも、凄いみたいだ……

うん、スキルに魔道具創造あつたじゃない？

なんか…この試験管に水を入れると、その水マジックポーションになるらしい。

…試験管から他の、コップとかに移すとただの水に戻るけど。

この試験管、魔道具でした。中身より容器のほうが凄かった……

…神しゃま…うん、装備整える時にあんまり神しゃまの力を多用したくないと思ったせいも、あるかもだけど……高性能すぎるよ神しゃま。

でもありがとう。

リージに使わせた試験管を濯いでいて、気づいたことで、とりあえずリージにも気づかれてはいない。

水入れたとたん、数秒発光して驚いた…私自身は割れない効果しか考えてなかったし。

丸薬はマズイ上に、効き目もいまいちで無いよりはまし…くらいらしい。

色々見て回っての感想は、うん確かにゲームの世界、だった。

リアルRPG

『たぶん始まりの村』

一通り回って、夕飯の食材を買いこんで、リージの家に帰ると……家の前では、ネコ耳ツンデレ幼女が待ち構えていた。

うん。本当に面倒臭そうな子だなあ…

火の魔法使いと、リージと私。

「何か、用？」

冷血モードに入ったリージに、私は苦笑した。

アイリーフはたぶんリージのことが心配なんだろうとは予想出来るが、私は基本ツンデレという人種を理解出来ない人間なのだ。友人のおかげ(?)で、どうゆうものがツンデレかは分かるのだが。好意を持つ相手に、キツイ言葉を投げつけるのはどうなのか。友人はそこがイイと言い張るが…

だからリージにも、わざわざ説明などはしない。面倒だし。

冷たいリージの視線に怯むことなく、彼女：アイリーフは吠えた。

「リージに用があるわけではないわ、私がつがあるのはそいつよっ！」

びしつと指をさされて、…うん、やっぱり面倒臭いと思う私。

そんな私の前に、リージは立った。

「ヒイラギさんに何の用？」

「リージには関係ないでしょっ！」

「ヒイラギさんは僕の恩人で、パートナーだ」

淡々とした口調だが、どこか響きの強い声でリージは言う。

おお、これはもしか、庇われてる？

小さいけどやっぱり男の子、かつこいいなあ〜と呑気に感心していたが、アイリーフは怒りで真っ赤になって髪を膨らませた。

「何よっ！ずっとソロだったくせにつ、私の誘いを断ってそんなひ弱そうな男と組むなんてっ！許さないんだからっ！」

「別にアイリーフに許してもらわなければならない。それにヒイラギさんを侮辱するなら、それこそ僕が許さない」

うん、女なんだけどって口を挟む間も無い。

それに今更性別言っても、かえって火に油だよね…きつと。

しかし言わなくてもリージの私を庇う態度に、アイリーフが切れるのは早かった。

「なによ、なによ、なによっ！そんな男っ！」

アイリーフは背中 of 杖を抜いた。

「アイリーフ!?」

リージの咎める声にも構わず、彼女は詠唱した。

「火よ、火の精霊よ、この名アイリーフが呼びかける、アイリーフの名のもと、集い寄りて力を揮えっ！」

「ファイヤーバードっ！」

リージが少し躊躇ってからナイフを抜き、アイリーフに飛びかかるうとしたが、少し躊躇った分発動の方が早かった。

出現し、形を持った火の鳥に、リージはとっさにナイフを捨て、私の方へ反転して…私を庇おうとしてくれた。

そんなリージを私は抱きしめ、片手を火の鳥の方へと差し出した。

「ひかりのかべ」

私達の前面で空気が煌めき、光が一枚の板のように形成された。

もちろん、火の鳥はそれにぶつかって霧散した。

「え、」

私に体当たりして、軌道からずらそうとしたけれど、体格差から抱きつくで終わってしまったリージは、けれど私の言葉に振り向いて、それを見た。

「……………すごい」

「な、なによ、それっ」

目を丸くして硬直していたアイリーフは、無事な私達…の、抱き合ってる格好を見て、再びその顔を怒りに染めた。杖を構え直す。

「火よ、火の精霊よ、この名アイリーフが」

今度はリージの方が早かった。

私から離れ、一気に走り寄り、アイリーフの前に立つ。目の前に立たれて、アイリーフの詠唱は止まった。

「どいてっ、どいてよりーじっ！」

激情した声が響く…が、次に響いたリージの声の方が、ずっと怖かった。

「うるさい、黙れ」

冷たいを通り越して、氷点下な声だった。

バシッと音がして、アイリーフの小さな体が地面に転がった。

リージの手元に杖だけが残る。

アイリーフは頬に手を当てて、身を起こす。両目からはポロポロと涙が零れていた。

「ひどいつ、何するのリージっ!？」

そんな彼女を気にすることなく、リージは片膝を立て…その上に杖を叩きつけた。

止める暇もなかった。

鈍いバキッという音が響いて、杖が中心から圧し折られていた。

リージの行動に、アイリーフは目を見開き…驚きでか、涙も引っ込んでいた。

「…わ、たしの杖、リーシャさんの、お師匠様の形見の」

「今のお前に母さんの弟子を名のる資格なんて無い、二度と母さんの名を口にするな」

リージの放り捨てた杖をアイリーフは拾い上げて、止まっていた涙を再びポロポロと落とした。

「ばかつ、リージのばかあっ!もう知らないっ!」

泣きながら、でもすれ違いざまに私を睨んで…彼女は去っていた。

うん。最後まで口を挟むことも出来なかったわ…まあ、これが私なんだが。

そういえば、二日目終了。

「ごめんなさい…何か変なことに巻き込んでしまつて…」

しゅんとした様子のリージの頭を私は撫でた。

「辛かつた、ね」

リージは決して、アイリーフを心から嫌っているわけでは無かつたんだろう。

「お母さんの形見、折らしちゃつたね」

そう、本当に嫌っているなら、これまでそんな杖を使わせているはずがない。

「…かあさんが、力を揮う者は感情だけで力を揮つてはいけないつて、力を揮う責任を持たなくてはいけないって、一番大切なことだつて……言つてたのに」

悔しそうに涙を滲ませるリージに、その言葉に、胸が震えた。

「私も気をつける」

「え？」

「凄く、素敵な人だつたんだね。リージのお母さん」

私の中の神しやまの力

なんでも有りな力だけれど、力に溺れないように。

「リージのお母さんの言葉、胸に刻んだ」

そつと胸元に手を置いて、微笑んだ。

神しやまを利用するだけの存在には、なりたくないしね。

リージはしばらくボーと私を見上げていて、それから心底嬉しそうに涙ぐみながら

「ありがとう」

と、笑顔になつた。

ささやかながら、夕飯は私が作った。

リージは野菜の皮を剥いたり切ったりは、それなりに出来るのだが、味付けが出来ないらしい。

両親が死んで、しばらくしてから自炊も頑張ろうとしたのだが…

「シチューを煮込んでたら、なんだか変な色になって…溢れ出てきて、鍋が…溶けました」

漫画かと突っ込みたいが、なにせアーサーさんの創った世界である…

「……………うん、了解」

それから台所ではお茶を入れるくらいにしか、使用していなかったそうだ。

塩以外の調味料は軒並み死滅していたので、野菜炒めと塩味の鳥肉スープである。

そしてパン屋さんで買ってきたパン。

うん、私も料理は簡単なものしか作れない。

しかもこここの台所の火って、かまどだし……………都会では、コンロのよくな魔道具もあるらしいが。

だから『火のこ』で炎操って何とかできたけど、普通の火だったら火加減調節出来ずに焦がしていた自信がある。

裁縫系の方が得意。

けど、リージは「美味しいです」と喜んで食べてくれた。

…うん、ちょっとキューンときた。なんだか、アイリーフとのいざこざ後から、リージの表情が更に柔らかくなったというか…

大したものではないのに、そう喜ばれると私も嬉しくなってしまう。うん。リージみたいな美少年に、懷かれて、「美味しい」なんていってもらえると、次はもっと頑張ろうとも思ってしまうよ。

「今日はお風呂用意しますね」

「え」

思わず声が弾んだ。

この世界に来て、初めてのお風呂である。正直嬉しい。

「まず薪割りしないとなんですけどね」

「あ、私がやるよ」

「いえ、でも」

「修行にもなるから、やらせて？」

裏庭に案内され、積み上がった薪の一つを手にする。

うん、せっかくスキルにサムライ進化があるのだ。

鍛えないわけにはいかない。

薪を空中に放りあげて、素早く腰の刀に触れる。

最初の一、二度は刀に触れるより、薪が地面に落ちる方が早かったが何とか調節してみた。

二つ切りが四つ切になり、六つ切りまでは出来るようになった。

目指すは八つ切りだが、気づいたらほとんどの薪を切り捨て終えた。

「ヒイラギさん、凄すぎです」

「あはは、ごめん……」

ちよつと楽しかったので、珍しく夢中になってました。

その後は二人で井戸から水を運んで、リージは家庭菜園の中から数束草を刈って、それを煮詰めた。

「それ、何？」

「あ、初めて見ますか？体や髪を洗う薬湯です。口にすると不味いんですが、髪とか体に塗って擦ると綺麗になりますよ」

「へえ、石鹸みたいなものかな？」

「ええ、でもかあさんは、これの方が髪がごわごわにならなくていいって言ってたし……その、ヒイラギさんも僕と髪質似てそうだから、丁度いいかなと思って」

確かに黒髪ストレートはお揃いである。

一人ずつ火の番をして、お風呂をいただいた。

薬湯、泡立ちといい、香りといい最高でした。

トラブルの、行方。

朝である。

胸元にはリージ……うん、胸触られてるね。

二晩一緒だったけど、やっぱりリージは私が女とは気づいていないようだ。

ベスト脱いでも元々つるぺたなせいだろう。

とりあえず昨日のように、リージを起こさないように起き……着替えて、裏庭で刀を振るった。

サムライ進化のスキルは凄まじい。

体が温まる程度に、刀を振り回し……台所に顔を出すと、起きだしていたリージがお茶を沸かしていた。

「おはよう、リージ」

「ヒイラギさん、おはようございます」

差し出された……コーヒーに似た風味のお茶を受け取る。

「ありがとう」

朝食は、昨日のパンの残り……うん、かさかさになっていたので、卵と牛乳と砂糖を混ぜた物にスライスして浸して、バターで焼きました。

後は野菜とベーコンの塩スープ

そのうちお米が恋しくなりそうだが、今の所はそれほどでもない。

二人して朝食を終え……うん、リージはフレンチトースト？を気に入ってくれたようで、尊敬の眼差しで見られました。

適当な割合だったんだけど、上手くいってよかったですよ。

……朝食を終えてから身支度を整え、ギルドへと足を向けた。

下手したらまた、アイリーフが待ち構えているかと思ったが、そんなことはなく……薬草採取の依頼を数件受けて、森へと向かうこととなった。

森は初日、リージの襲われた辺りに向った。

薬草の一つはこの辺りに群生しているらしい。

リージの様子が変わることもなく、少し安心した。…うん、だってあれはトラウマものだし……

今になって思えば、私もよく平気だったなと思う。

普通の女の子なら悲鳴を上げてただろう。

私のように、サーチ&デストロイとはいかなかったはずだ。

いや、友人なら…私と同じかそれ以上の行動をしそうではあるが。

………観察には走らないよな？人として、助けるよね？

………少し、自信がない。………友人、だし。

ひとまず友人への疑念は置いておき、薬草採取を手伝う。

薬草の効能や姿形、どこらに生えるものかということ教わりながら…依頼以外の薬草も見かけるたびに教えてもらった。

「薬草って、意外といっぱい生えてる物なんだね」

「いえ、ここが聖域近くの森ということ差し引いても、何だか今日は…凄いですよ」

確かに初めて訪れた一昨日より、森は何だかわつさりしていた。

「あ」

私は道端に生えてる水晶を見つけて、足を止めた。

「………」

「…一昨日には無かったよね？」

「ええ、というか道端に生える聖石を見たのは、初めてです」

とりあえずそれを採用して、ポケットに入れた。リージに渡そうとしたけど、見つけたのは私だからと遠慮されてしまったのだ。

そんなわけで、比較的簡単に依頼の物は揃ってしまい…お昼にとギルドで買ったお弁当を広げるまでもなかった。

けれどせっかくなので、私の上陸した河原まで出て、お昼にすることになった。

うん…河原は更に凄かった。

聖石が…人の腕ほどの大きさの物が流れついていて、周囲に小さな聖石がゴロゴロ生えてました。

あー…これ、私が装備整えるために川から降りた時、躓いて川に落とした奴だ…と、気づく。いや、河原に降りる途中に川から生えてたんで、ちよつと蹴っちゃったら意外と簡単に折れちゃったというか…

「ヒイラギさん…こんな、大きな聖石……初めてです」

「……うん、もしかして薬草とか聖石が生えてたのって、これのせいかな？」

「だと思えます」

原因、私かあ…と、内心で呟いておいた。

見事な、スルースキル（笑）

森の豊かさのために置いていても、どうせ他の冒険者が取るだけだからと、私は聖石をリュックに詰めた。

「もうこれの報酬は山分けてことで、いい？」

聞いてはいるが決定事項である。

そんな私の様子が分かったのだらう、リージも抵抗なく頷いてくれた。

「ラッキーだったねえ」

「本当に」

お弁当のサンドイッチを食べて、少しのんびりしてから村へ帰る。

「そういえば、ここに来てからまだ魔物と戦ってないなあ……」

「元々あまりいませんしね」

「角のある兔は魔物だよね？」

遠くに見える姿を指さして聞く。

「ええ、島では見ませんでしたか？この辺の一角兔は、あまり凶暴じゃないんですね。物凄く近くで遭遇しなければ、襲ってはきませんね」

「なるほど」

「この辺で見かける魔物はスライムと一角兔、魔犬ですね。注意が必要なのは魔犬くらいです」

「スライム……やっぱいるんだ……」

私の視線の先には、ぐによくによとした半透明の濁ったヘドロのような固まりがあった。

うん。これが噂をすれば影ってやつだね？

リージはナイフを構え、私も刀に手を添えた。

「スライム？」

「はい」

目も口もない。クラゲのようなものだったが、それは細かく振動す

るかのように震え、飛び跳ねた。
空中で、薪割りの要領で切った……………

はずだった。

「うおっ」

慌てて飛びかかってきた、それを避ける。

「ヒイラギさんっ」

地面に落ちたソレにリージがナイフを突き立てると、それはジュウツと音を立てて溶け消えた。

「大丈夫ですか？」

「うん、ありがとう」

刀を一振りして鞘に戻し、苦笑を落とす。

「ごめん、うつかりしてた」

「何があったんですか？」

心配そうなりージに、スライムを切れなかった訳を話そうとして…
嘲笑に遮られた。

声の方を見れば、木の影から三人の男女が出てきた。

うん。アイリーフと愛の下僕達である。

アイリーフの杖は短い物になっていたが、ひらひらゴスロリ服も健在である。

……もしかして、ずっと隠れて待ち伏せしていたのだろうか？

「暇なの？」

私の心を読んだかのようなリージの呟きは、笑うのに忙しい三人には届かなかった。

「スライムも倒せない冒険者なんて、初めて見たわっ」

「あはははは、あんなにカッコつけて、情けない」

「弱い者同士で傷の舐め合いが、リージ」

ああ、喧嘩を売りにきたのかと、とても分かりやすい挑発だった。

「さて、帰ろうかりージ」

「はい、ヒイラギさん」

にこつと笑い合い、さくさくと帰り道を進む私達に、三人は慌てた様子で追いかけてくる。

ぎゃーぎゃー言っているが、華麗にスルーする私達に、その早歩きのスピードにも追いつけない三人。

少しムツとしていたリージも、三人を引き離して村の入り口が見える頃になると、少し息を切らしながらも楽しそうだった。

うん、私もちよつと楽しかったですよ。

私の楽しい気分につられたのか、神しゃまもきやらきやはしゃいでいる感じがしたのだった。

クエスト達成、と？

村に帰った私達は、さっそくギルドを訪ねた。

まるで初日の時のような、微妙な時間帯のためか建物内には人の姿は少なかった。

しかしカウンターには先客がいて、今日ミアリスさんは居眠りしていなかった。

「あ、レリーフさん」

リージの表情が強張る。

振り向いたレリーフも、表情を強張らせた。

たぶんパーティメンバーに断り、私達の方へ歩み寄る。

ああ、昨日のアイリーフとの件かと気づく。

そう言えば姉妹だったっけと思い出した。

「リージくん」

「レリーフさん…アイリーフの杖のことですか？」

リージは声を固くして、彼女を見上げた。

「三年前とは違います、彼女も冒険者です。謝りませんよ」

「リージくん、違う、」

「違います、次僕らに杖を向けるなら、今度こそ僕は彼女にナイフを向けることを躊躇いません」

「リージ」

ぽんと頭に手を置いてみる。

「ヒイラギさん？」

「レリーフはリージを責めにきたわけじゃ、ないと思うよ」

レリーフの表情は一見怒りのようにも見える…が、目が…泣きそうな色をしていた。

「落ち着いて」

「ヒイラギさん…」

「ありがと、ヒイラギ。リージくん、ごめんね」

レリーフは深く頭を下げた。

「あの子が、ごめんなさい。三年前のこと……」

泣きだしそうになったリージの表情は、更に固さを増したようだった。

「レリーフさんに謝られても……」

小さく呟いて、腕を引かれる。

「もう、いいです」

それは許しの言葉ではなく、拒絶の言葉だった。

本当に泣き出しそうな表情になったレリーフを、心配そうなパーティのメンバーが促し……レリーフ達は去っていった。

気まずそうなミアリスさんのいるカウンターへと、二人で立つ。聞きたいことはあるけれど、一先ずは依頼達成報告である。

採取してきた薬草と量を確認して、ミアリスさんも気を取り直したように笑顔になった。

「はい、依頼達成確認しました。ギルドカードをどうぞ」

カードを出し、二人で一緒に水晶へと触れさせた。

一瞬淡く輝く。

カードの履歴を確認すれば、依頼達成数が3になっていた。うん、地味に嬉しい。

薬草のことを色々知れたのも嬉しかったし。面白かった。

「あ、あと聖石を量ってもらえますか」

「え、リージくんまた聖石量れるくらい見つけたのっ？」

スゴイと目をキラキラさせたミアリスさんに、二人して顔を見合わせた。

……うん、リアクションが怖いよね。

「でも丁度人、いないしね」

「そうですね」

私はリュックの中から、聖石を取り出した。

小さな生えたての物をザラリと……それだけでもミアリスさんはスゴ

イスゴイと騒いだが、何とかだんだん声が途切れて…最後にあの聖域から流れてきたらしい大きな石を取り出すと、涙目になっていた。

「……………どうしたの？これ」

「河原に流れ着いていて、聖石が生えてました」

「か、河原ってまさか…っ」

「ミアリスさん？」

「神聖石っ」

ミアリスさんはそう呟くと、真っ青になった。そして慌てて私に返してくる。

「仕舞ってっ、すぐにっ」

「え、これ拾ってきちゃダメでしたか？」

「違うのっ、すぐ教会行って説明受けてっ」

時間との勝負っ！と、泣きながら叫ばれて、私達は慌ててギルドを飛び出した。

神聖石と、祝福。

神父さんは猫だった。

ネコ耳とかではなく、もろに猫人。

イメージでいうと長靴を履いた猫？背丈はリージくらいだけれど、白い顎鬚？を伸ばしていて、虎縞の模様も美しい老猫様でした。

友人が「おっもちかえりーっ」と叫んで、小脇に抱えてハイスキップで逃走する姿を幻視した。

「どうしたんだね、リージ」

目を細めた猫神父様は、声も良かった。

友人がきゃーきゃー言ってる声優さんに似てる。

本当、友人がここにいないくて良かった。猫神父様の身の安全的な意味合いで。

「はい、なんだかミアリスさんが」

「これを急いで持っていくようにと」

猫神父様は目を見開いて、息を飲んだ。

「神聖石っ、流れ着いていたのかね？」

私とリージは頷く。

「ちよつと待つていたまえっ」

慌てて祭壇に駆け寄った猫神父様は、祭壇の中から箱を取り出し、そこから布を取り出し祭壇の上に広げた。

「ここへ」

促されて、それを置く。

すると聖石は輝き、光りを振り撒きだした。

「素晴らしい、ほとんど力が失われておらん」

「あの…神聖石って何か聞いてもいいですか？」

「おお、すまぬ。だが先に手続きをすませてしまおう。これを見つけたのはリージと君の二人かね？」

私は頷いて、

「ヒイラギです」

と、自己紹介をした。

「私はこの教会の神父でヨルギル。よろしくのお」

私に名を告げ返して、猫神父様は聖書らしき書物を広げた。

「神の柱の欠片を見つけし幸運よ、彼らの中でとどまり形となれ」
ぶわっと、石と私とリージの体が強く発光した。

「え」

「うわっ」

驚く私達に、猫神父様は書物を閉じて満足そうに頷いた。

「これは…いつたい…」

淡い青い、神秘的な輝きはなかなか消えない。

リージが不思議そうに両手を見る動作は分かったが、光で姿はよく見えなかった。

たぶん私も同じ状態かもしれない。

「ギフトスキルが授けられておるのだ、神聖石は長く放置しておると人や世界の邪気を吸収し魔を呼び寄せるのだ」

「え、でも聖石が生えてたり、薬草が」

リージの疑問に猫神父様は、悲しそうに首を振った。

「それはまだ邪気を吸収してない期間だけで、神聖石は聖域になれば危険な力ある石なのだ。西の魔都区が出来たのも、神聖石のせいだと言われている」

「うん、だからミアリスさん慌ててたのか」

魔都区がどうゆう所かは分からないが、響きからしてヤバイことが分かる。

「ゆえに急いで神聖石から神力を抜く必要があったのだ。抜いた神力は最初に石を見つけた者に吸収され、ギフトスキルとなる。ただし教会で祝福のスキルを持つ神父のみが実行できるのだ」

「祝福？」

「うむ、神聖石に限らず、神の力を害無く人の身に降ろすスキルだ」
猫神父は微かに笑った。

「このスキルを持つ神父は、必ず聖域近くの教会に派遣されるのだよ。この時のために。まさか生きているうちに使えるとは思わなかったがね」

リージも知らなかったくらい、神聖石が聖域から出てくるのは珍しいことなのだろう。

…ちよつと反省しておく。

原因、私だし。うん。

そして、やっと光りが収まった時、私はともかく…リージの姿は明らかに変化していた。

「うわ、髪が伸びて…なぜ？」

「リージ…耳」

リージの耳が尖っていた。

まるでダークエルフのように……それだけではなく、耳の後ろから黒い羽根のような葉っぱのようなものが、髪飾りのように生えていた。

そしてリージが最初に気づいたように、髪が私と同じくらい伸びていた。

私の指摘にそれらを触って、リージは声も出せずに「なにこれ？」と、唇を動かしたのだった。

ギフトスキル、覚醒。

リージは頭に私の持っていたタオルを被って、ギルドへと戻った。ミアリスさんがなぜか、料理人のおばさんに怒られて小さくなっていた。

「なにがあったんですか？」

「あつ、ヒイラギさんつ、リージくんつ」

私達の姿にぶわわつと涙を零す。

「ごめんなさいーっ、慌てて、報酬渡すの忘れてましたああつ」

「「あ」」

私とリージは同時に気づいた。うん、私達も忘れてたね。

「うう、減給処分ものですう」

「まったく」

ごんつとおばさんはミアリスさんを殴り、奥の職場へと戻っていった。

「もしかして、上司？」

「上司でお母さんなんです」

それからごそつとケースを出した。

「こちらの聖石総量、金貨一枚で、薬草の依頼三件で銅貨八枚となります」

「金貨を銀貨で貰えますか」

「はい」

銀貨五枚と銅貨四枚を受け取り、残りをリージに渡した。

そして

「スキル確認と更新をお願いします」

「はい、ギフトスキルですね？」

猫神父様が言うには、ギフトスキルを確認更新する場合は、無料で出来るらしい。

なにせ神の力：場合によってはとんでもない物もあるらしい。

うん、私の中にあつたレベルのついてないものとかも、そうゆづのに含まれてるのだろう。

「ヒイラギさん…僕と一緒に確認してもらえますか？」

「ん？出来るの？」

「あ、はい。パーティメンバー同士なら確認可能ですよ」

リージは早く自分の身に起こったことが知りたいのだろう…ギルドカードを出して、水晶に触れた。

私はカードを出さず、同時に同じ水晶に触れた。

会得スキル

『薬草知識B』『剣技・ナイフC』

『聖石採取B』『家事全般D』

『覚醒・古代ダークエルフの血族』

『覚醒・森の王』

『覚醒・精霊の友SS』

『運命の導き』

『異世界への片道切符』

「……………覚醒？」

リージが呟くと、頭の中に説明が浮かんだ。

『覚醒・古代ダークエルフの血脈』（血筋の中で最も力ある種族への覚醒・長寿な戦闘系エルフ。古代種の力は強大）

『覚醒・森の王』（血筋の中で最も力ある種族への覚醒・長寿な樹木種の中でも特別な存在。森の支配者）

『覚醒・精霊の友SS』（血筋の中で最も相応しい力への覚醒・精霊術師の資質）

「うん、なんか凄いな…」

「他の二つも気になります」

『運命の導き』（詳細不明・発動条件『婚姻』）
『異世界への片道切符』（詳細不明・発動条件『婚姻？』）

「詳細不明……って」

「……なんか、この二つは私と関係しているのかもしれない。
なにせ、『異世界への片道切符』だ。

アーサーさんだって、傍観者的な位置に立っても普通に好きになつた人とかいただろうし、そうゆう人を連れて帰りたいとか思ったりもしただろう……うん、つまりリージは今の所私の婿候補なのかもしれない。

「あ、薬草知識のレベルいつのまにか上がってました」

「へえ、よかったねリージくん。じゃあスキル更新してもらえるかな？」

私達の呟きに首を傾げながらも、ミアリスさんが促がしてきたので、リージは頷いた。

「スキル、更新」

履歴状態になったカードには文字が増えていた。

会得スキル

『薬草知識B』 『剣技・ナイフC』

『聖石採取B』 『家事全般D』 『精霊の友SS』

『覚醒・古代ダークエルフの血族』

『覚醒・森の王』

『運命の導き』

『異世界への片道切符』

「あ、力の方は覚醒が取れたね」

「はい……でも、ちょっと安心しました……」

リージはタオルを取る。

「もしかして、僕は両親の子じゃなかったのかと…」

「うん、なんか凄い先祖がいたみたいだね」

「あまり実感わきません…」

ミアリスさんはリージの容姿変化と履歴を見て、目と口をまん丸く開いて硬直してしまった。

「次はヒイラギさんですね、僕も見ていいですか？」

うーん、ちょっと不安だけど、『スキル偽造』を発現させておく。
「いいよ」

増えたのがとんでもないものでなければいいけど…

会得スキル

『サムライ進化A』 『剣技・刀B』

『一族魔法SS』 『細工師AA』 『家事全般C』

『ちやぶ台返しSS』

『魂生成』

『スキル継続』

『異世界へのフリー切符』

…うん、突っ込み所は『ちやぶ台返しSS』だね。

スキル更新、完了。

『ちやぶ台返しSS』（どんな重い物体でも気合いでひっくり返せる能力）

『魂生成』（死んだ人間・または死の床に臥した魂の保存・生成
正し、近しい身内、配偶者、恋人の願いが必要）

『スキル継続』（得たスキルを世界を越えても継続できる）

『異世界へのフリー切符』（自由に世界を行き来できる。正し、
始点となる世界に碇であり指針となりうる人物の任意が必要）

…うん、何だかよく分からない物もあるけど、深く探るとヤバイ気がしたので

「スキル更新」

して、水晶球から手を放した。

「…ヒイラギさんのものも、なんだか凄いですね」

「なんかちやぶ台返しは、カッコ悪いけどね」

「え、どんな重い物でもひっくり返せるって、凄そうですね…」

「あ、もしかして、リージはちやぶ台つて知らない？」

リージは不思議そうに頷いた。

SSってことは、通常スキルに含まれているだろうし……たぶんどこかの地区に日本っぽいエリアがあるんだろうと思う。

「ちやぶ台つてね、小さなテーブルのことだよ。うん、伝え聞いたイメージが強くて…頑固で癪癪持ちな父親が会得しやすいスキルのはずで……私が持っていて、発動出来そうにないスキルだよ」

「そうですか？」

「うん、気合いでひっくり返せるんだよ？…気合いがちょっとね…」
このスキル名で、気合いを入れられるはずがない。

「この異世界ってスキルは、僕のものに似てますね…」

「うん、たぶん効果も似てるのかもね。リージの方は結婚しないと、効果は正確に分からないみたいだけど」

スキル更新を終え、ちよっとお茶にしようかと、リージを誘った直後：ギルドのドアが勢いよく開いた。

「あ、そういえばさっき、アイリーフちゃん達がリージくん達を探してたわよ?」

ミアリスさんが、息を切らしたアイリーフを見て、言った。

うん、見れば分かるから。

：本当に残念な天然さんだね、ミアリスさん。

アイリーフはリージに気づいて何か叫ぼうとして……リージの外見の変化に固まった。

リージは気にする様子もなく、私の手を引いた。

「いきましよう」

「お茶はどうする?」

「家で……僕がいますよ」

「ちよっと待ちなさいよっ!」

アイリーフと下僕はギルドの出入り口を塞いだ状態で、引き攣った声を上げた。

「り、リージ、リージよねっ、なんでどうしちゃったのソレ、髪が、耳が」

リージは深々とため息を吐いた。

「なにか、用?」

「何か用って、そんなの、どうして私の質問に答えないのよっ、さつきも無視するしっ」

「くだらない、どいて、邪魔」

空気の温度が、気のせいではなく下がった気がした。うん……どうやらリージは、完全にアイリーフを見限ったようなのだが、アイリーフは杖を折られるまでされたのに、気づいてないらしい。

それが更に腹立たいのか、リージの放つ空気がひんやりしている。ん?これ、もしかして、精霊の力かな?

神しゃま効果か、何となく『力』の動きが分かる。

そういえば、魔法使いと精霊術師は何が違うんだろうか？

このままにしておくと、精霊の力が勝手に発動しそうな気がしたので、とりあえず落ち着かせようとリージの頭を撫でてみる。

……うん、集まりつつあった『力』がふわんと溶けた。

「リージ、落ち着いた？」

「あ、はい」

なぜだかリージは恥ずかしそうに俯く。

そしてなぜだか、アイリーフの視線が私に向いていた。

嫉妬と嫌悪の色が見える表情で。

対戦？と、鍛冶師

さて、唐突だが場所はギルドの裏庭：ちょっとした広場になっていて、訓練場のようになっていた。

初心者が希望すれば、簡単な護身術武器の扱いを教えてもらえるそうだ。

ミアリスさんのお母さんに。

うん、アイリーフとその下僕達で出入り口を塞いでいたから、夕飯を食べに来たり依頼を終えて帰ってきた人達の邪魔になった。それに眉を寄せたミアリスさんのお母さんが、リージを呼んで裏口を指さしたのだ。

揉め事は外でやれというわけだ。

リージを促がしたのは、アイリーフ達がからんでいるのがリージで、彼女達に言っても私達が動かなければ聞く耳もちそうにないからだろう。

そして

「スライムも倒せない剣士どのに、稽古をつけてやるよ」

と、下僕の一人がすらりと剣を抜いて言った。

うん、スルーしたのが腹立たしかったらしい。

「ちよっ」

アイリーフは目を丸くして、止めかけたが私を見てそれをやめた。

リージが私の前に出ようとして、アイリーフは叫んだ。

「リージはどいてなさいよっ！そんなスライムも倒せない奴と、組む価値なんてないって教えてあげるんだからっ！」

「黙れ、お前こそ俺が誰と組もうと関係ないだろ」

再び精霊の力が集結しだす。

「リージ」

頭に手を置いて引き寄せる。

「え、あ」

よしよしと頭を撫でてから、一步前に出た。

「いい加減面倒だから、私がやるよ」

リージの冷たい声に顔色を失っていたアイリーフは、私の言葉に笑みを浮かべた。

顔立ちは可愛いのに、あんまり可愛くない…嗜虐的な微笑みだった。下僕の方は精霊の集結に気づかなかったのか、苛ただしげに舌打ちしてリージを睨む。

できるならリージも一緒に打ち負かしたかったのだろう。

実力的に出来るとは思えないが。剣とナイフではリーチ差で剣の方が有利そうだが、リージの素早さと体力からいっても下僕くんに負けるとは思えないし。

「じゃあ剣を抜いてかまえろっ」

私はわざとらしく肩をすくめて、呆れた様子でため息を吐いた。

「聞こえなかった？面倒だって、いいからおいで」

それにこれは剣じゃない、刀だ。

呟いて、素早く柄に手をかけた。

「馬鹿にしゃがってっ」

わーと駆けてくる相手に腰を落とし、刀を振るった。

ぼとぼとっ…と、剣のなれの果てが地面に落ちた。

下僕くんは自分の手元を見て、完全に固まって…私はその様子を見て、顔を顰めた。

「…未熟」

「なっ」

下僕くんの顔が、怒りで一気に赤くなる。

しかし別に彼に言ったわけではない。

「剣だけ、切り落とすつもりだったんだけど…うっかり首まで切り落とす所だった」

もう一人の下僕くんが気づいて、「ヒイツ」と悲鳴を零した。

うん、首からだらだらと血が零れてるから。

駆け寄ってきてたから、ちょっと間合いの把握が上手く出来なかつ

たようだ。

「うん、でもいいよね？ 剣を抜いて、向けたんだ…当然殺される覚悟だっと思ってただろう？」

にこつと笑い、首を傾げてみせる。

下僕くんは首に手を這わせ、ぬるりとした感触に青ざめて…へなへなと座り込んだ。

おおっーと、ギルドの建物から声が上がる。

建物の裏手にある窓には、それぞれ飲み食いしながらも冒険者達が張り付いていた。

そして、一人が、窓から転がり落ちるかのように飛び出した。

背丈はアイリーフと同じくらいの、けれどゴツイ女性だった。

「リニアさん？」

リージが首を傾げる間に、固まっていたアイリーフと下僕くんを蹴り飛ばして、へたり込んでいた方の下僕くんの襟首を掴んで放り投げ、一直線に私の前へと進んできた。

正しく、突進としか言いようのない迫力だった。

そして、ズサーッと音を立てて、私の前で正座をして頭を下げた。

「すいませんっ、その剣を見せて下さい」と。

思わず見とれるほどに見事な、土下座だった。

「…リージ？」

「村の鍛冶師のリニアさんです」

雄ライオンのように広がった金茶の髪に、茶色の瞳をキラキラさせて…ゴツイけれど妙に愛嬌のある可愛い顔立ちの…たぶんドワーフっぽい女性の鍛冶師、うん、予想外だったね。

リージは苦笑を零した。

「いつか、ヒイラギさんの刀を見たら、飛んでくると思っていました」
うん。確かに飛んできた。

そして見事なスライディング土下座だった。

もしかして、スキル持つてるんじゃないだろうか？

幻想宝具と、スキル

あまりの迫力、あまりに見事な土下座に、私は苦笑して腰から刀を取り外しスルリと抜いて見せた。

うん、私以外には扱えないって効果もつけてたから、本当に見せるだけだ。

「見るだけで良ければ、どうぞ」

「ありがとうっ」

目の輝きが三割増しになった…嬉し涙？

しかしランランとしていた瞳が「ん？」と丸くなり、顔色はさあ…と青くなっていた。

あれ？見るだけなら、害はないはずんだけどな？

首を傾げた私とリージの前で、彼女は正座のまま呼吸を乱した。

うん…忘れてたんだ。

この世界には『鑑定スキル』があるってことを。

「アヴェエロン王国の選定剣っ、ううんっ、ジパング帝国の国宝刀っ、神が創りし幻想宝具っ」

叫びは悲鳴だった。

あ…うん、そういえばアーサーさんが創った世界でしたっけ…

何だか引つかかる国名とか、単語とかに、少し意識を遠くへとやった。

「幻想宝具？」

リージが首を傾げるのに、リニアさんは青ざめたままだが目を輝かせて言った。

「アヴェエロン王国の選定剣と同じ、世界神が創造した宝のことよっ、これは刀だから、ジパング帝国の国宝刀でしょ？どうして持ち主がこんなところにいるのっ？基本国から出れないでしょうっ！？」

「え？」

リージの目が私を写す。リニアさんの言葉通りなら、私は島人じゃないことになるからだろう。

私は手のひらをかざした。

「ちよつと待ってください。ジパング帝国ってどこですか？私は島国出身で、そこはジパングという国ではないです」

「ええーっ！ジパング帝国以外にも幻想宝具の刀がある土地がっ！？」

叫んでから私を上から下まで見て、リニアさんは言った。

「あ、そういえば『着物』じゃない、帝国の人じゃないの？本当に？」

うん、刀に着物ね…サムライ進化のスキルもあつたし、忍者とか芸者とかもありそうだなあ…と、思う。

「帝国の者ではありません。ジパングという名前も初めて聞きました。そこにはこれと同じ刀があるんですか？」

「そのはずよ、幻想宝具『ざんてつけん』特性・ある一種の食材以外、切れぬ物は存在しない史上最高刀。担い手を一流のサムライ（モデル有り）に、する力を持つ刀？って、見たけど…見せてもらえて私は嬉しいけど、これって普通…見せちゃいけない物じゃない？あははと乾いた笑いをリニアさんは零した。

「わ、私、今日が命日になるのかしら、うつんでも、持ち主つきの幻想宝具を見られたんだもの、ドワーフ一族として、死んでも悔いはないわ」

目が虚ろだった。

「うん、別に殺しませんから。あんまり見事な土下座だったから、つい見せてしまった私が悪いんですし」

「土下座？」

「え、さっきの頼み方のことですか？」

「ん？スキルじゃないかと思うくらい凄かったから」

「私ここ数年スキル更新してなかったから…あれ？あの頼み方、い

つからしてたっけ？」

やっと顔色がまともになったリニアさんにほつとして、顔を上げると半分忘れていたアイリーフと愉快な下僕達が目を回して倒れているのに気づいた。

「あれ、そういえばアレ、手当しないと出血多量でヤバイかも」

「別にいいんじゃないですか？放っておいても」

私の視線を追って、リージが冷やかに切り捨てるのに……ミアリスさんが駆けてきて「放っておけないからあつ」と、突っ込みを入れかけて倒れて潰して……彼女達にトドメをさしたのだった。

「ああ、なにやってんのっ、ミアリスっ」

「リニアちゃんに言われたくないいつ、うわあんっ、ごめんねっ、アイリーフちゃんっ、しつかりしてええええっ」

カオスだ……と、私は何となく呟いた。

しかし一つ分かったことがある。

幻想宝具……神しやまの力で創った物は、鑑定スキルで分かるらしい。そのわりに、私の装備一式を見て騒がなかったことは、持ち主の許可を得て見せてもらうと『見える』のが鑑定スキルなんだろう。危なかった……換金所で、下手に私が神しやまの力で創った物を出してたら……うん、きっとあのアクセサリー出すよりヤバイことになってただろう。

あー……神しやまの力で細工物の材料創るのもヤバイから、確かにレア物……これ以上は作れない。

うん、でも趣味で創る分には、世に出さなければいいか……と、思いつつリージを促がしてギルドへと戻った。

「えっ、ヒイラギさんっ、手当て手伝つてくれないんですかっ」
ミアリスさんの叫びに振り返って、小首を傾げる。

「とりあえず止血しとけば、死にませんよ。それに、先に剣を抜いて向けたのはそっちです……私が手当をする義理も義務もないでしょう？」

「まったくだね、ほらミアリス、血止めの薬塗ったら早くカウンタ

ーに戻りな、私のスキル確認するよ」

うん、リニアさんが心配したのって、実はミアリスさんだけだったらしい。

蹴り飛ばしたり放り投げたの、彼女なんだけどね。

ちなみにリニアさんのスキルには、やっぱりあった。

『土下座SS』（心から真剣な願いを訴えるスキル。その想いの強さによつては、神ですら願いを叶える力を産む。）

うん、履歴見せてもらい、土下座のスキル効果の説明も聞きました。しかしたぶん、SSになったの、私のせいかもしれない。

私が土下座を見事だと感心してたら、神しゃま…めちやくちはしゃいでたし。

人神じゃないけど、神を宿した人という意味なら正しく人神だし、スキル効果で願いを叶えると祝福を与えたことになるんだろぅ気がする。

神しゃま効果…は、私にしか適応されないようだし。

あれ？でも、幻想宝具の持ち主になった人には…神しゃま効果ありそうな気も……

とにかくリニアさんのスキルを見て、リニアさんはいつの間にと目を白黒させてたしミアリスさんも凄く凄いと叫んで……直前まで心配してたアイリーフ達のことをすっかり忘れ去ってしまったようだった。

修行と、お茶会

リニアは鍛冶師だが、調金細工師でもあると知って、私は次の日から彼女に弟子入りすることになった。

リージも精霊術師になるかどうかは分からないが、力の制御を覚えるため教会の猫神父様の師事を受けることになり、出会ってから初めての別行動だ。

まあ、慌てて稼がなくてもいいくらい資金はあるのでいいだろう。うん、この世界に来てから…妙に金運には恵まれてるので、材料費は山ほどある。

アクセサリー製作は私の趣味だ。

留め金や細かな鎖を作るのは大変だったが、リニアさんのアドバイスも受けて何とか製作出来た。

「器用ねえ…こんな細かい鎖、初めて」

「そうですか？」

「そうよ、首飾りなんかは大抵、革ひもに羽根とか石とか飾るタイプくらいよ。庶民のアクセサリーね」

「ああ、そうゆうのも好きです」

指輪にネックレス、イヤークフを同時進行で製作して…合間に休憩中のリニアとお茶をする。

そんな生活が暫く続いた。

リージの力の制御はなかなか難しいようで、帰ってご飯を食べてお風呂に入って寝るといふ作業を、作業としか言いようのない様子でこなすので、どんな修行をしているのか詳しくは知らない。

でも、私が家事全般を引き受けても、お礼は言っても恐縮はしなくなつた所はいいことだろう。

ちなみにリージの長く伸びた髪は元の髪形へと整えられた。

うん、ベッドから起き上がる時、腕の下にあつて…ちよつと首を痛めかけたらしい。

それにあの長さだと、完璧に神秘的な美少女にしか見えない自分が嫌だったようだ。

アイリーフ達が、またリージに絡んだかどうかは聞いてないが…リニアさんから何かあったらしいことは聞いた。

なんか下僕の方二人は、怯えて使い物にならなくなってるらしい。

「あの子達、私が苦手だから。レリーフに引つ張られてこなければ、ここには近づかないわよ。以前あの子達が冒険者になるための装備を揃えようと来た時、追い返したからねえ…」

「どうしてですか？」

「私は『子供』に持たせるような刃物は作ってないからね」

リニアさんは何か思い出すかのような表情で、ため息をいつて言った。

「勇者ごっこするような子供に真剣持たせないでしょ？昔は…リージのお母さんの師事を受けてた頃のアイリーフなら、分かってたみたいだったけど……今はダメね。レリーフもビシッと叱ればいいのに、あの子には甘いというか、弱いんだから」

怒るリニアさんに、ついくすくすと笑ってしまった。

「仲いいんですね」

「そりゃ、」

リニアさんとレリーフとミアリスさんは、なんと同じ年で幼馴染の仲という話だった。

噂をすれば影…と、言うか

次の日、リニアさんの家には、休日のミアリスさんとレリーフが遊びに来て、私と遭遇することとなった。

「まさかつ、本当に噂どおりにリニアちゃんに彼氏が出来てたなんてっ」

手が離せないリニアさんの代わりに、戸を開けて顔を合わせたとなんのミアリスさんのセリフがコレだった。

大げさに驚いて、よろりとよろけてさえ見せる芸の細かさを、当然

私とレリーフはスルーした。

「久しぶり、ヒイラギ」

「うん、久しぶり」

まだリージとの会話を引きずっているのか、少々ぎこちない笑みを浮かべる彼女に笑みを返した。

「この間はごめん」

「それはリージに言っておげなよ」

俯く彼女の肩をそつと叩いて、家の中に入るよう促す。

「あれ？なに？この空気…まさかつ、レリーフまでヒイラギさんと？」

私はミアリスさんに、生ぬるい視線を向け、そつと彼女の前でドアを閉めようとした。

「うわああんっ、待ってえっ、冗談だからあぁっ」

お茶の支度が終わる頃、丁度リニアさんは一段落つけて作業場からやってきた。

レリーフを見て、ふんつと鼻を鳴らす。

「まだ落ち込んでるんかい、レリーフ」

「リニア…」

「まったく、敵に対してはどこまでも不敵になれるのに、相変わらず身内には弱々しいねえ」

「だって、アイリーフがあっ」

耳をへによりと伏せさせて、レリーフはしくしく泣き出した。

うん、初めて会った頃の姉御っぽい風格は、微塵も残っていない。

「いい加減、甘やかすのはやめて、叱り飛ばすことも必要だよ」

「そんなことしたら、ただでさえ嫌われてるのにつ、もっと嫌われちゃうううっ」

「そんなことないよ、レリーフちゃんっ、アイリーフちゃんはちゃんとお姉ちゃんのこと大好きだよっ」

あわあわと焦ってミアリスさんが声をかけるが、レリーフは顔を手

で覆ったままふるふると頭を振った。

「だって、お姉ちゃんは今計なことしないでって、リージくんに嫌われた私のせいだってっ」

「あん？そんなの八つ当たりの言いがかりじゃないか、」

それぞれの前にお茶を置いて、私は首を傾げた。

「席、外しましょうか？」

「いいよ、この際ヒイラギさんも聞いといっておくれよ」

サンドイッチと、ケーキ。

「あ、そうだこれ」

レリーフがふと、暗さを少し消して持っていた手提げ袋から布包みを二つ取り出した。

すると、リニアさんとミアリスさんの目が輝いた。

「差し入れのサンドイッチとケーキよ」

「レリーフちゃん大好きっ」

「嬉しいわあ、レリーフの手作り久しぶり」

「レリーフの手作りですか？」

私も椅子に腰を下ろして、彼女の手元を見た。

布包みを広げれば、薄いセロファン紙のようなものに包まれたサンドイッチと、パウンドケーキが出てきた。

「うわ、美味しそう」

「なんととってもレリーフちゃんの家事レベルはAAだもんっ、実際すっごく美味しいのよっ」

ミアリスさんがはしゃいで言うのに、リニアさんが顔をしかめて「こらっ」と叱った。

「あんた、ギルド職員が個人のスキルを勝手にばらしていいの？」

「あ」

ミアリスさんの顔色がさあっと青くなる。

「うわああんっ、ごめんなさいっ、レリーフちゃん、お母さんには言わないでええっ」

「別にいいよ、隠すもんでもないし」

「レリーフ、こうゆうことは反省を促すためにも、きちんとしないと。いつか困るのはミアリスだよ」

「まあ、それより食べよ？いつも通りなら、リニアもヒイラギもご飯まだでしょ？」

確かにお昼は回ってしまっていて、二時になるかどうかという時間

帯だが、作業に熱中していてご飯はまだだった。

リニアさんと私の家事レベルは一緒だったので、大抵お昼は休憩のお茶の後、のんびり食べに出ている。

小さな村だからか、生活習慣は知れ渡っているようだ。

リニアさんは仕方ないなあという顔をしながら、サンドイッチを手に取り私にも取るよう促がした。

うん、サンドイッチ久しぶりである。

「いただきます」

一口含んだだけで、その美味しさが分かった。

パンはふかふかしつとりで中の野菜はシャキシャキ、ペースト状のディップは垂れることのない状態で野菜とパンの美味しさを引き立ててる。

メインらしい鳥肉（？）には香ばしい焼き目と仄かに柑橘系の香りがして、噛み切りやすいほどよい食感が堪らなかった。

「うわっ、弟くん並」

「弟くん？」

つい零した感想に、問いかけられる。

「うん、友人の弟くんで、友人に料理を仕込まれてる子」

まだ小学生なのに、彼の作るご飯やデザートは絶品である。

「友人が言うには、男心を掴むにはやっぱり胃袋を掴まなければ……らしい」

「ふーん……ん？弟なんだよね？」

「うん」

首を傾げるリニアさんを置いて、ミアリスさんはケーキを切り分けて食べ始める。

やはりパウンドケーキのようで、中にはドライフルーツと胡桃が入っているようだっただ。

「くううっ、生きててよかったあっ」

「大げさな」

「レリーフちゃんは、自分の料理の腕を分かってないっ！私が男だ

「つたら、すぐさまプロポーズするのにつ」

「ごめん、ミアリス。あんたが男だったら、即答で断ってるから」

「ええっ、なんでえっ」

「だってあんたが男だったら…軟弱そう」

レリーフは腕をさすった。想像して鳥肌が立ったようだ。

確かに、ミアリスさんの残念な性格は、女性だから許されていると
こがあると思う。

「レリーフは甘ったれた男と、なよなよした男が生理的にダメだからねえ」

「えー、じゃあヒイラギさんは何で平気なの？ヒイラギさんも外見
上は細かいし、物腰は柔らかいし、顔立ちも綺麗だけど」

「ヒイラギは性格がしっかりしてそうだし、心意気っていうか、敵
に対する心構えとか対応が気に入ったから平気。それに立ち振る舞
い、凛々しいじゃない？」

「確かにねえ」

ミアリスさんは呻いた。

「そ、そんな、彼氏なんて興味ないって二人がつ、ヒイラギさんつ、
リージくんはともかく、レリーフちゃんとリニアちゃんまで落とす
なんてっ、なんて手が早いの…っ」

がしりと手を握られ、ミアリスさんは潤んだ眼差しで私を見た。

「私も恋人の一人にして下さいっ」

ずるりとレリーフとリニアさんは、椅子から滑り落ちかけた。

「あんたこそが、目えつけてたんかつ」

「ミアリス…あんたねえ…」

「いや、ごめんなさい」

そつと手を外して、提案を断ると…「即答っ」と呻いてミアリスさ
んはテーブルに突っ伏した。

私はケーキにも手を伸ばす。

ドライフルーツのレーズンっぽいものは、実はレーズンじゃなくて
ダークチェリーっぽい味がした。

食感はしやりしやりしていて美味しい。

お菓子は久々だったので、凄く嬉しかった。

そろそろチョコとかも食べたいと思う。アーサーさんの創造した世界だし、彼が嫌いでなければ存在していると思うんだが…

髪留めと、付与

「まあ、ヒイラギはモテそうだし、故郷に恋人とかいるんじゃない？」

レリーフがくすくす笑いながら言う。

すっかり顔色もよくなり、普段の調子が戻ってきたようだ。

「そうだねえ、許嫁とかいそう」

リニアさんまで頷きながら言うのに、苦笑した。

「そうですね、故郷でもよく告白されましたよ女性に」

筆頭は友人だが…後輩とかによくラブレターを貰ってた。

……共学だったし、特に勉強・運動が出来るってわけでもなかったんだけど…不思議だ。

「でも同性と付き合う気はなかったですし、恋人はいませんよ」

「ふーん」

「許嫁なんてのも、勿論いませんでした」

「そっか……」

ふと沈黙がテーブルに落ちた。

三人の動きが止まっている。

私は首を傾げた。

「……ど、どうせい？」

妙に強張った声が、小さく響いた。

本当に小さな呟きだったけれど、三人の声がぴったりハモったのでちゃんと聞きとれたのだ。

「ちよっ、ヒイラギあんた女なの？！」

「うっそ、ちよっと待って」

「ヒイラギさんっ、本当ですかっ？」

三人の慌てふためいた様子に、傾げていた首を反対方向に倒した。

「別に、性別を言った覚えはありませんが」

男性扱いに、否定も肯定もしてませんでしたけどね。

「そうだけどねえ」

「慌てることですか？」

「いやその…」

「あはは…女の人に告白しちゃった……」

私はミアリスさんの肩に、ぽんと手を置いた。

「気にすることありませんよ、友人は女性で、男性の恋人なら四人ほどいますが、女性の恋人も十二人います」

「そうゆう問題じゃないですしっ、っていうか、その友人すごっ」

なにやらぐだぐだになったまま、休憩時間を終え…私は調金作業に戻った。

見学にレリーフとミアリスさん、リニアさんもいる。

「うわー、綺麗っ」

「どうりで…男にしちゃあ繊細な細工をするとは思ってたんだよ…」

「これはもうすぐ完成ですよ、よかつたらあげましょうか？」

銀細工の髪留めは、花に鳥、猫と少し似通ったデザインにしてみた。ちょうど三つだしいいだろうと思うて言うと、ミアリスさんの目が輝き、レリーフも嬉しそうに微笑んだ。

「いいのかい？これはいい出来だよ？」

「初めて作った物ですし、リニアさんには場所も道具も借りてますしね」

「あ、私この鳥さんがいいですっ」

「ん、ミアリスが鳥なら」

「私は猫ね」

くすつと笑ってレリーフは自分の耳を撫でた。

「私が花か…似合うかね？」

「大丈夫ですよ」

私はリニアさんのライオンの鬘のような髪を梳いてみた、つけるとしたらこの辺だろうか？

「きつと似合います」

ん？なんで三人とも黙っちゃうかな？

それになんか顔赤い？

「…天然タラシ？」

「リージくんもやられてましたよ」

「まいったね…」

こそこそと囁き合う彼女達は放っておいて、どうせあとちよつとだから今日中に渡した方がいいだろうと作業の手を進める。

…しかし仕上げの作業を進めながら…変なことに気付く。

なんか、この髪留めたちに『力』が集まってきているのだ。

………うん、別に神しやまが何かしているわけ…じゃ、ないな…

なんだろ？

ともかく仕上げて、三つ目を完成させた時…『力』がそれらに定着するのを感じた。

「ん？」

ぴくんと震えて振り返ったのはリニアさんだった。

「今、何か…」

「あー…、一応完成しました、けど…」

「えっ、ちようだいちようだいっ」

それぞれを三人に渡して、額に浮いていた汗をタオルで拭った。

「どうですか？」

「すごく可愛いっ」

「そうだね、ありがとヒイラギ」

さっそく前髪を留めるミアリスさんに、少し猫の表面を撫でるレリ

ーフ…そして

「どうですか？リニアさん、何か分かりますか？」

私の問いかけに、たぶん『鑑定』していたリニアさんは深くため息

をついた。

「本当に貰っていいのかい？」

「一度あげると言ったことを、ひるがえしたりしませんよ」

「ん？高価な価格鑑定しちゃったの？リニア」

「確かに、初めて作ったとは思えないほど綺麗ですもんね」

リニアさんは…もう一度ため息をついて、顔を上げた。

「一個、銀貨一枚」

「ええっ、か、髪留めなのに？銀細工でも聖製加工されてる物じゃないでしょっ！？」

「そうだね、普通高くて銅貨五枚くらいだろ？」

確かに元の材料費である銀の値段は、三つ分で銅貨一枚と硬貨二十五枚だった。

魔除けの加工を施されている銀は高いらしいが、この世界では金も銀もそれほど高い物ではないらしい。

ちなみに金貨類などの硬貨は少量の金や銀などは混ぜられているが、少し混ぜるだけでその色に染まる特殊な液体鉱物を加工して作られているらしい。

国の製貨スキルの持ち主達（そうゆう仕事についた人達）だけが、加工出来るもので元の液体鉱物も一応見せてもらった…と、いうか飲んだ。ちよつと白濁としていて、スポーツドリンクの味がした…一応鉱物の一種らしいが、人体に害はないらしい。

場所によつては飲み水代わりにもしているらしいくらい、珍しい物ではないのだ。

ただ贋金は作れない。鑑定スキル持ちじゃなくても、ちゃんと製貨スキルで作られた硬貨じゃないと、見ただけで違つと分かるらしい。ちなみにスキルを持つてる人でも、ちゃんと国の行政の仕事としてではないと作れないし、場合によつてはスキルを失うという。

……うん、アーサーさんきつと贋金問題とか面倒だったんだろうなーと思う。

「他の二つの持ち主へ、声を届ける効果」

暫し躊躇った後、リニアさんは呟いた。

「魔法効果が、付与されてるんだよ…魔法具は効果の小さい物でも銀貨価格よね」

魔道具作成と、アイリーフ

「魔道具を作りだすには、二種類の方法がある。魔術師が理論と法則、付与する魔力を生成して道具に付与して作り出す物。それから職人が、世界から付与される物とね」

「世界から付与？」

「滅多にないことだけどね、有名所では教会本部の女神像かね」

私は苦笑して手を上げた。

「すいません、この大陸に来て間もないので、有名所と言われても……」

「ああ、まあ、機会があつたら見にお行き。祈るとランダムにだが怪我が癒える女神像があるのさ」

病は無理だけどねと、少し悲しそうにリニアさんは微笑んだ。

そして気を取り直したかのような笑顔に変わる。

「世界からの付与は魔道具と表現するより祝福物と呼ばれることが多いね。魔術師の作り出した物は、効果の方向性が決められる代わりに、付与した魔力が切れると効果も切れるけど、世界が付与した祝福物は効果の方向性はバラバラだし、いつでも作り出せる物じゃないけど、効果はほぼ永久だね。物が壊れでもしないかぎり」

「へえ」

リニアの説明を受けた後日、いくつか細工を作りあげ……なんとなく仕組みは分かった。

アーサーさんが残した仕組みなのだろう。

細工の材料がこの世界の物であること、細工の出来、細工に込めた思い、それらに世界が反応するらしい。勿論ランダムなんだろうけど。

うん。作りあげた腕輪を見ながら思う。

緑の石を葉のような形に見えるよう組み込んだ銀の腕輪：リージにあげようと思っていたソレにも世界の力が宿った。

「あんた、銀細工とよっぽど相性がいいんだね」

「んー、でもその髪飾りは三つでワンセット扱いでしたから、実質二つ目ですよ？」

「生涯かけても作り出せない奴の方が多いんだよ」

腕輪をじつと見てみると、何となく効果が分かった。

「…沈静効果？」

「ん？分かるのかい」

「なんとなく…あれ？これってスキルですか？」

リーアさんは腕輪を受け取って見て、頷いた。

どうやらいつの間にか鑑定スキルらしきものを、得られたらしい。レベルは低そうだけど。

うん、価値は分らないし、効果だって何となくという感じだし。更新するほどのものではなさそうだ。

「確かに沈静効果だね。恐慌状態に陥らない力だよ。精霊術師には丁度いいね、精霊術師は感情の暴走に力もつられちまうから」

返された腕輪をしまつて、道具を片付ける。

「なら、今日はここまでにして、教会を覗いてリージに早速これあげに行きます」

「ああ、そうしてあげな」

教会に向かうと、その入り口の横で膝を抱えているアイリーフの姿があった。

…うん、面倒だから無視するけどね。

目はあったけど、何も言わずに扉に手をかけた私に、アイリーフは飛び上がるように立ちあがった。

「ちよつとつ、普通落ち込んでいる女の子がいたら、声をかけるもんでしょーっ」

怒鳴りはするが、本当に落ち込んでいるのか猫耳はねてしまっているし…眼差しにも私を嫌悪する色は薄かった。

「どうしてリージは、あんたみたいな他所者を信頼するのよ……」
俯いて声を震わせるアイリーフに、私は首を傾げた。

「さあ？」

「さあってなによそれーっ！」

「だってそれはリージにしか、分からないことだし？」

首を傾げてみせた私に、アイリーフは体も震わせて涙を浮かべた。

「なんで、リージは冒険者なんかになるのよ…っ、薬草採取なんてしても、もうお師匠様達は生き返りなんかしないのに…っ」

俯いて、ぼろぼろ涙を零す彼女に、私は首を傾げた。

「事情はよく分からないけど、リージが真剣に冒険者や薬草採取をやってるならやってるだけ、それらを軽視している君とは、絶対に組まないだろうね」

「なっ」

涙を零しながらも睨んでくる彼女の頭に、ぼんと手を置いて退かず。

「よく考えてみるんだね」

そうして私は教会へと足を進めた。

何か怒鳴ってくるかと思ったアイリーフからは、何もなくて…それならそれだと振り返ることなく。

薬草と、死。

「ヒイラギさんっ」

訓練室にノックして入ると、丁度一段落ついた所だったのか猫神父様はお茶を入れ、リージはテーブルの上を片付けていた。

「こんにちは、」

「おお、これはお久しぶりですなヒイラギ殿」

「お久しぶりです。神父様」

ほんわりと笑い合っている間に、リージはどこからかもう一脚椅子を持ってきてくれた。

「ヒイラギさん、今日はどうしたんですか？」

「うん、ちよつと面白いのが出来てね。リージにプレゼント」

ハンカチに包んでズボンのポケットに突っ込んでいただだけの腕輪を、取り出して差し出した。

「えっ、そんな貰えませんよっ」

「貰つて。リージを思つて作つた物だから」

「おや、魔道具かね？」

猫神父様の言葉に、リージはぎよつとしたようだった。

「ええ、分かりますか？」

「見せてもらつても？」

まあ、この効果を見てもらえば神父様もリージに進めてくれるだろうと、私は頷いて渡した。

「ほう…素晴らしい」

そして私の予想通り、猫神父様は腕輪をリージに差し出してくれた。

「リージ、天然魔道具の法則は知っておろう？これはお主のために作られた物だ。受け取りなさい」

「で、でも…」

「沈静効果があるらしいんだ。ね、リージ受け取って？」

私がリージの顔を覗き込んで言うと、リージは凄く恥ずかしそうな

顔になって…でも猫神父様から腕輪を受け取ってくれた。

うん、もしかしたら男の子だもんね。装飾品恥ずかしかったか…まあ、リージの役に立つアイテムだし我慢してほしい。

「ヒイラギさん…ありがとうございます」

顔を赤くしながらも腕輪を装着してくれたリージに、私はうんやりぱり似合うと満足して微笑んだ。

さて、今日は終わりとリージと一緒に帰ることになり、教会を出る時にはすでにアイリーフの姿はなかった。

リージは周囲を見回して、不思議そうな顔になり…それから、はつと私を見上げた。

「…あの、アイリーフに何か言われましたか？」

「うん。でも私も言ったからね」

「え」

「リージは冒険者として薬草採取、何か拘りをもって真剣にやってくるでしょう？」

出会って間もない私でも分かることだ。

「それを軽視しているような子と、組む日なんて訪れないよってね」
リージは私の言葉に、何だか泣きそうな顔になった。

悲しそうで、どこか嬉しそうな。

「父さんと母さん、病気で死んだんです。聖域近くの村なら、簡単に手に入るはずの薬草で治る病気でした」

教会の出入り口の階段に腰掛けて、リージは力なく笑った。

「でも、あの時期…一つの聖域が、魔に浸食されたんです」

私は猫神父様の話を思い出していた。そう…神聖石と

「西の魔都区？」

「はい…とは言っても、神聖石のことは知りませんでしたけど、當時もどうしてこんな事態になったのか原因は分かりませんでした。西の聖域の一つが魔に浸食されたせいだと知ったのは…両親が死ん

「だ後でした」

あつという間でしたと、どこか遠い目をしてリージは当時の様子を語った。

草木は枯れ、水は濁り、病が流行り…魔物は増え力を増しました…と。

「この村にも沢山の冒険者が押しかけました。聖域近くの村でも、大変な状態だったんです。他の所なんか、余計に悲惨だったらしいです。食べ物や薬草の値段は高騰しました」

「なるほど、買い占めとかが起こった？」

それならば、アイリーフが根底で冒険者を憎んでいるらしいことも、分かるかもしれない。

リージは頷いて、更に話を続けた。

「それどころか、村人から脅して取り上げたり、盗んだりするような輩もいました。殺されかけた人もいて、母さんが怒って犯人を突き止めて、火柱を上げたこともありました」

懐かしそうにリージは上空を仰ぎ見た。うん、それって火柱の高さへの目線だよね？

「病人だったのに、変な話ですが…死ぬ直前まで元気でした。僕に心配かけないように振る舞ってましたのでしょうが」

「リージ」

私はリージの家で暮らしている。両親の部屋も、魔法使いの研究室も見せてもらっている。

そして、前々からあつたはずの庭の薬草園も。

「リージの家に薬草はあつたね？」

「…はい。でも以前の村では…薬草は簡単に手に入る物と……ほとんどの家庭には……無かつたんです。そして変化はあまりにも急激でした。両親は薬草を村に配りました。当初はまだ家にも余裕があつて…でも、両親が発病した時には…手元にも勿論村にも薬草はありませんでした」

リージは苦笑した。

「今、薬草採取の依頼を出している人達は、その頃のことを焼きついてしまっている人や、乾燥させただけじゃなくて…それ以上の長期間の保存法を研究している人や、少量でも効力を高める研究をしている人達なんです」

「なるほど…」

アイリーフには薬草採取が…両親を失った過去に囚われ、すでに意味がないようなことをしているように思えたんだろう。

リージは両親の死を無駄にしないため、前を向いて進んでいるのに…たぶん彼女こそが、過去と憎しみに囚われているのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5477p/>

かみしゃまと、いっしょ。

2011年6月12日00時40分発行